

方正友好交流の会 会報第4号

星 火 方 正

～燎原の火は^{ほうまさ}方正から～



方正県に近い伊漢通開拓団跡。今、中国人が住む

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、国際的な友愛の精神が広がるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第4号） ～燎原の火は方正から～

目 次

曠野に果てたたちはは	衛藤 藩吉	1
方正一魂の交流場	高良 真木	3
故・宮沢一三さんを悼む (方正日本人公墓の支援に尽力した生涯)	寺沢 秀文	5
母の死刑を無罪に変えたのは周恩来 崔鳳義さん(松田ちゑさんの息子)が自伝で告白	奥村 正雄	8
私たちの方正日本人公墓	長田 末作	11
負の遺産こそ大切に	名取 敬和	12
耳底に刻まれたうまき声 —「中国残留孤児・国賠訴訟」について—	井出 孫六	14
いま なぜ この旅を? —中国・交流と歴史検証の旅—	方正友好交流の会	16
会員便り	加藤重幸 野田良雄 大崎やま子 佐貫 幸雄	18
中国から送られてきた写真集『中国残留孤児』	編集部	21
書籍紹介 「『満州』記憶と歴史」 山本有造編著 京都大学学術出版社	編集部	22
日本に残留し定住したある日本人 ～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～第2回	大類 善啓	25
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの	編集部	37
お礼とご報告		38
書籍のご案内		38
編集後記		39

こうや
曠野に果てたちはは

衛藤 藩吉（東京大学名誉教授）

『就友』と題する小さなパンフレットを庵谷磐さんから 10 年程前に頂いた。庵谷さんは私と同じ奉天一中の先輩、引揚孤児のアフターケアや残留孤児の厚生に身を挺している義人である。『就友』は「中国残留孤児の国籍取得を支援する会」という会の機関誌である。その表紙に短い詩が記してある。かつて別なところでも紹介したが、激しく胸を打ち、忘れられないので、ここでも紹介させて頂く。

「一切合切失って^{がつさい}
二人の子の手を引き
三日三晩
四六時中歩き続け
五臓
六腑痛めつけて満洲の
こうや
曠野に果てたちはは
ななころび
七 転
やおき
八起の人生でしたが
見せたい今の幸せぶり
九天直下超特急で
十萬億土からこの世へ
ツアーはありませんか」

半世紀以上むかしのことである。敗戦の混乱の中で、ソ連軍の進撃と空襲。攻撃の目標は軍であろうと民間人であろうと差別なく遠慮会釈なかった。占領されれば、掠奪と暴行は毎日のことで、日本人避難者はただじっとこらえなければならなかった。そのことを思うと、この短い詩を読んで涙が溢れるのをこらえ得ない。私だって一步誤れば惨憺たる暴虐の犠牲となる運命であったかも知れない。現に私は広島で原爆の襲撃をうけ、数ヶ月髪の毛が抜け落ち、数年間白血球減少症に悩まされた。当時放射能の人体に与える影響について種々の臆測があり、結婚のとき人知れず煩悶した。初めて子を持ったとき、ひそかに健常者であるかどうかを疑い続け、以来孫でも生まれる度に一種の恐怖に襲われる。原爆で受けた心の傷は癒しがたい。

同じように、北満からの避難者の心の傷は、なかなか推し測り得ないほど深いに違いない。その難民の集結地方正県！多数の餓死者、凍死者、そして附近の村々では中国人に殺された人も少なくないと聞く。

皆様の努力によって今は、静かな中日友好園林の緑と、豊かな田畠とに囲まれた町となった。そこに周恩来みずから建設、命名を許可した「方正地区日本人公墓」が清潔に保たれていると聞く。そして藤原長作氏の水稲栽培の実践は方正県の名を中国の内外に知らしめることとなった。藤原氏は知る人ぞ知る、後半生を、中国各地で生産力が高く、かつ美味しい寒冷地水稲栽培技術の普及に捧げ尽くした人で、方正はその拠点であった。今、藤原氏亡きのち、藤原式水稲栽培は普及しつつあるという。暗い残酷な歴史の一こまを背負う方正県も、これからは明るい農業集散地として栄えて行くことであろう。

奉天（現在の瀋陽）で生まれ、奉天一中を卒業して内地の上級学校に入った私は、まだ方正県を訪れる機会を得ない。近く是非訪れたいものである。

ところで、方正の物語は単なる敗戦の悲劇の一こまではない。敗戦のとき、中国に残された残留孤児たちは、夢にまで見た山河が緑に溢れ、人々は心優しいはずの祖国に帰りたがった。1972年の日中国交正常化以来その道は開け、多くの残留孤児たちが祖国を永住の地と定めた。若くして帰国し得た人々は、日本語の習得も速く、日本の社会文化環境に馴染むことが出来た。しかし40才台、50才台になって帰国した人たちにとっては、日本語は外国語であり、その習得には多大の労力を必要とした。いや勉強しても勉強しても、子供が言葉を覚えるようにはいかなかった。大人になってからの外国語学習は、脳の発達の限度から非常に困難なのである。日本政府の残留孤児担当者はこの課題への心遣いが全くなかった。中途半端な日本語の初歩的学習を済ませて世間に放り出された残留孤児には、困難な前途が立ちばかり、就職にも近隣との付き合いにも支障が生じた。いや年齢を重ねれば重ねるほど支障は致命的となった。たまりかねた残留孤児たちは三度国会へ立法的な救済の道を請願したが実現せず、ついに一昨年来裁判に持ち込んで、老齢になってからの生活保障を求めようとしている。私は日本兵や軍属として戦った台湾人には、日本人と同じ軍人年金を与えるべきだとかねて主張してきた。残留孤児も同じである。裁判には呼びかけ人として、その訴訟を励ますとともに、原告側勝訴をひたすら願っている。夢にまで憧れた祖国に見離されるとは、これら悲劇の残留孤児にとって余りにむごい対応の仕方ではあるまいか。

＜衛藤瀋吉さん：本会の会員。1923年、中国瀋陽（旧満州奉天）の生まれ。東大教授を定年退職後、亜細亜大学学長を経て、現在東大名誉教授。専門は中国を中心とする東アジア史。著書『近代東アジア国際関係史』『現代中国政治の構造』『無告の民と政治』『大国におもねらず小国を侮らず』ほか。昨年の本会総会では「方正日本人公墓と今日の日中関係について」という題で講演をいただいた＞

方正一魂の交流の場―

高良 真木（画家）

2004 年の夏、小泉首相の度重なる靖国神社参拝で、日中関係は国交正常化以来最悪と言われていた。重慶や北京のサッカー試合では、中国の若者が日本チームに激しいブーイングを浴せていた。

ちょうどその頃、元満蒙開拓団関係者から墓参団の一部始終を綴った手紙を頂いた。
（以下要約）

8 月 24 日、公安の車に先導された 6 台の四輪駆動車に分乗して、旧開拓地のロータリーへ到着。9 年前に植樹した松は 15cm ほどの幹に育っていた。中国側が好意で造ってくれた「中日友好万古長青」の碑の前で記念写真を撮る。雑木林の中の旧開拓団病院跡地で、日本から持参した酒、水、菓子を供える。母村から同道してきた住職が線香に火をつけ、各自が手向ける。住職が簡単な法衣を羽織って読経をはじめると、林の北側から罵声が聞こえてきた。遠く離れて我々の行動を黙認していた省と県の役人が近寄ってきて、慰霊行事を止めるように指示した。前回植樹に来たときは、県政府の用意してくれた昼食の弁当を一緒に食べ、開拓民も犠牲者だと理解してくれていたのに、小泉首相の言動がこんな山奥まで知れ渡っているとは思わなかった。供え物を全部ビニール袋に入れ、土や木の葉をかけ、涙をふきながら跡地を離れた。

9 月 9 日の毎日新聞朝刊は長野県の開拓団遺族らの慰霊式が、中国側の要請で中止されたことを報じた。黒龍江省方正県の日本人公墓で 2 日行われる予定だったが、中国で高まる反日感情を背景に「国民世論を刺激したくない」中央政府の意向があると見られる、と。

敗戦間近の 1945 年夏、根こそぎの召集で男たちを軍隊に取られた開拓地には女、子供、年寄りが残されていた。突然のソ連参戦、日本の消息も定かならぬまゝ、地元の中国人の襲撃に追い立てられるように、向かったのは関東軍の補給基地・方正だった。そこへ辿りつけば食糧もあるし、松花江をさかのぼって日本の船がやってくる、と人々は信じた。だが船は来ず、次第に食糧は底をつき、寒さと疫病で、8000 人の難民のうち 5000 人以上が春を待たず死んでいった。

『天を恨み、地を呪いました―中国方正の日本人公墓を守った人々―』は、その後野ざらしになった遺骨を見つけた残留婦人松田ちゑさんの要請を受けて、1963 年、方正

県人民政府が日本人公墓を建てたことを記している。

「日本軍国主義者と日本人民をはっきりと区別しなければならない。ここで死んだ日本人民もまた侵略戦争の犠牲者である。」墓石に彫る碑名の案としてあがってきた「日本侵略中国死亡日本人公墓」は排されて「方正地区日本人公墓」が建立された。公墓を建てたのはかつて日本侵略者に土地を奪われてさすらい、抗日歌曲「松花江のほとり」に、故郷への思いをつのらせた中国人民であり、知らずとはいえ奪った土地に王道楽土を夢見た日本人入植者は、国に見捨てられ、家郷はるか遠く冷たい地の下に眠っている。恨みを友情に転じ、日本人公墓は中日友好の思いを発して止まない。「日中関係の北京が政治、上海が経済の拠点とするなら、方正は魂の交わる場」との言葉は重い。

開拓団遺族の慰霊の再会が王毅駐日大使から日中友好協会の平山会長に告げられたのは、停止からほぼ一年後だった。

2006 年の暮、青年の友好交流の発展のため、中日友好協会の招請を受けて、神奈川県下 45 名の高校生が友好省県である遼寧省を訪問した。柳条湖の 9・18 記念館を見学した高校生の一人は、そこに展示されている歴史の事実を全く知らなかったことにショックを受けた、と訪中報告に書いている。戦争を知らない若い世代が歴史に出遭い、日中友好の道を歩き出している。

戦火にきたえぬかれた方正地区日本人公墓の志を、帰国 2 世 3 世はじめ若い世代が引き継いでいくことを、心から喜ぶたい。

＜高良真木さん：本会の会員。1930 年東京に生まれる。1953 年コペンハーゲンの第 2 回世界婦人大会に出席、ソ連・中国を訪問。1966 年以後、画業の傍ら日中友好運動に携わる。現在、日中友好神奈川県婦人連絡会会長、神奈川県日中友好協会副会長。1952 年に中国入りし、朝鮮戦争後の日中貿易交流再開に貢献された高良とみさんは、真木さんの母堂に当たる方である＞

故・宮沢一三さんを悼む

(方正日本人公墓の支援に尽力した生涯)

寺沢 秀文

(飯田日中友好協会副理事長、当会理事)

元満蒙開拓団員であり、方正日本人公墓の支援活動等にも尽力された長野県高森町の宮沢一三さんが昨年12月23日に肺炎と合併症のためにお亡くなりになった。享年76歳、長寿社会となった今日ではまだまだこれからというお年なのに残念でならない。

宮沢一三さんは1929年(昭和4年)、長野県南端下伊那郡の山村・泰阜村の農家に生まれ、昭和18年3月に満蒙開拓団(泰阜村大八浪開拓団)の一員として単身、旧満州に渡った。16歳の時に終戦を迎え、現在の黒龍江省方正県での難民生活の時、現地の中国人に助けられ、昭和40年に日本に永住帰国するまで、22年間を方正県で農民として暮らした。

永住帰国後はいくつかの職を経て、昭和52年に高森町内のJR飯田線「市田」駅近くに「ハルピン食堂」を開業、本場仕込みの本格的な味は多くの地域住民に愛され、特にこの店のラーメンを愛好する人も多く、その味が無くなったことを惜しむと共に宮沢さんの逝去を悼む声も多い。

宮沢さんは帰国後も残留孤児・婦人の帰国支援や帰国者の生活の改善等のために長年頑張ってきた。宮沢さんの郷里・泰阜村を含む下伊那郡地方(飯田市含む)は長野県の中でも最も多くの満蒙開拓団を送出した地域であり、いわば全国で最も多くの開拓団を送出した地域でもある。当然に残留孤児等も帰国者も多い。宮沢さんは帰国後、日中友好活動にも早くから参加、県内でもその活動の活発さで知られる飯伊日中友好協会(現在は飯田日中友好協会)に前身の日中友好協会飯田支部の時代から参画し、長年その役員として活動すると共に、個人的にも帰国者やその子弟等の相談相手として親身になって面倒を見てきた。また、当時から親交のあった串原義直元衆議院議員(元飯田日中友好協会会長)や森田恒雄県議(飯田日中友好協会副会長)等を通じて国や県に陳情する等して、残留孤児・帰国者支援策を実現させるためにも奔走されてきた。その功績等により方正県や日中友好協会等からも表彰状や感謝状が贈られている。

当方も同じ飯田日中友好協会の役員として共に活動し、また2004年(平成16年)秋の長野県開拓自興会主催の旧東北地方友好訪中団には宮沢さんも奥さんの志ずえさ

んと共に参加された。既に二度も脳梗塞で倒れられ体調も余り十分ではなかった宮沢さんにとって、これが最後の方正行きとなった。旅の中で宮沢さん御夫婦より方正の話、終戦前後のお話等をいろいろと聞かせて頂いたことも今は懐かしい思い出である。

宮沢さんと言えば、特に知られているのが、その経営する「ハルピン食堂」の店内に招き猫の貯金箱を置き、これを「日中友君・好ちゃん」と名付け（名付け親は飯田日中友好協会副会長でもある森田恒雄長野県議とのこと）、方正支援のためのカンパ金を集め、十数回に渡り方正公墓維持のための支援金を方正に送り続けてきた。その思いの根底にあったのは、終戦直後の貧困の中で、方正の地元の中国人たちに助けられ、その恩義をずーっと忘れないということからであった。同時に、自身が満蒙開拓団員として送り出される時、学校長や在郷軍人会の会長に「どうしても行け」と軍刀で脅されて強制的に行かざるを得なかったという理不尽な経験から、戦争や権力という理不尽なもの、また世の理不尽なこと全てに対して反発するという反骨精神の持ち主の方でもあった。方正時代から苦楽を共にされてきた奥さんの志ずえさんは、泰阜村の隣の阿南町出身であり、泰阜村開拓団員として渡満し、終戦後は方正の中国人の家に養女としてもらわれていたのを、同じ泰阜村開拓団員ということで昭和28年に方正で結婚されている。つい先日も閉店したハルピン食堂兼の御自宅をお訪ねすると、奥さんは「(2004年に)最後に夫婦一緒に方正へ行って来られて良かった」と笑っておられた。

戦後60余年を経る中で、満蒙開拓を経験し、時代に翻弄された生き証人であった人達が次々と鬼籍に入られていく。そして、また一人、満蒙開拓に生き、翻弄され、それに負けなかった生き証人が旅立っていかれた。当方もこの4月16日から1週間、「旧満州を調査記録する会」(池田精孝代表)による「松花部隊」等の軌跡を辿る現地調査に参加し、その初日に薄暮の日本人公墓に墓参してきた。正面ゲートを入った辺りは昨年よりもまたさらに整備されていた。それを目にした時、宮沢さんが生前良く言っておられたこと、「日本人のための墓なのにその管理は中国の人たちがやってくれている。日本人だってもっとあそこにお墓参りに行かなくちゃいかん」という言葉が甦った。我々日本人としてなすべきことは何か。そのことがこの方正公墓からも問われている。

混沌の時代を懸命に生き、方正の支援に生涯を捧げた宮沢一三さんの遺志をこれからも継いでいかななくてはならないと心し、方正公墓を後にしてきた次第であった。宮沢さん、どうか安らかに眠り下さい。合掌。



2004年9月 方正公墓のそばに建つ「友好平和」の碑の前で
宮沢さんと夫人の志ずえさん



「日中友君・好ちゃん」と名づけられた貯金箱の前で
名づけ親の森田恒雄県議（左）と宮沢さん



ハルピン食堂にある方正公墓支援の
招き猫の貯金箱

母の死刑を無罪に変えたのは周恩来

崔鳳義さん（松田ちゑさんの息子）が自伝で告白

奥村 正雄（当会・参与）

松田ちゑさんの息子・崔鳳義さんが自伝を完成させた。中国語で A5 版、310 ページ。自分でパソコンを打ち、プリントし、製本まで自分の手ひとつで仕上げた、文字通り 1 冊 1 冊、手づくりの半生記である。「東京回想録 崔鳳義著 2006 年 12 月 日本東京」なぜこの本を書いたか、本のタイトルをなぜ「東京回想録」としたか、序言で彼はこう記している。

「私はいかねがね、一篇の文章を書き、波乱に富んだ人生の、自分が歩いてきた道を記録し、自分の人生を総括したいと思ってきた。たとえそれが曲折に富んだものであれ、平坦なものであれ、生き生きとしたものであれ、平凡なものであれ、とにかく私はそれを書くことによって、自分の前半生の総括をしたいと思ったのだ…」

本の題名をどうするかについても迷ったようだ。「追憶の記」としようかとも思ったが、自分は名のある人間ではないので、適当ではない。さらに「生ありし時」とも考えたが、それでは時間が長すぎ、息を引き取るまで書かなければならず、妥当ではない。あれこれ迷った末、「東京回想録」がいいと思った。この文章は私が東京で仕事を失ったあと、暇な時間を利用して、思い出しながら書いたものだからである…と書いている。

この書きっぷりでも容易に想像できるように、筆者は単に中国残留婦人と中国人との間に生まれた 2 世であるために嘗めなければならなかった苦難を、そのまま並べ立てたのではなく、母親譲りの文才を駆使して運命との対峙を、時に冷徹に、時に詩情豊かに描いた。

この本はいずれ日本語に翻訳されるべきものと私は思うが、この本を私が読み進むうち、その時その時の母親と息子の姿と表情が目の前に浮かんで、しばらく本を措けなかったくぐり、ここで 2, 3 紹介したい――

■ 2 人の妻と異母兄弟

1945 年の冬から翌年春先にかけて、松田ちゑさんは方正で病が重く、生死の境をさま迷っていた。このままでは死を待つばかり、という状態で彼女は崔さんの父親に引き取られた。実は崔さんの父親には奥さんと男の子がいたのだが、男の子の母親はこの時、夫婦喧嘩の末、男の子を置いて実家に帰ったまま 1 年余りも戻っていない。彼女は夫がお金を持って謝罪に来るのを待っていたが、頑固でメンツにこだわる崔さんの父親は、意地でも頭を下げて彼女を迎えに行こうとは思わなかったし、彼女が戻って来るとは夢にも思わなかったのだ。そして松田さんと再婚したのである。ところがその後、この前妻がひょっこり戻ってきたのである。普通ならここでひと波乱起きるところだが、ここでは何事も起きなかった。同じ屋根の下で、一人の夫と二人の妻とそれぞれの男の子が同居するという、奇妙だが破綻のない家庭が維持されたのである。この信じられない家中のバランスが成り立った理由を筆者はこう書いている。

「私は自分の母親をママと呼び、彼女を叔母さんと呼んだ。叔母さんの性格は私の母

親とはまったく逆で、口八丁手八丁、社交的で世話好き。そして私の母親は内向的な性格、中国語もうまく言えないし、言葉で自分の気持ちや考えを表現するのが苦手で、おとなしく、他人に逆らわない性格である」

■ 医師を目指した秀才

こうして貧しく、複雑な家庭環境に育ちながら、崔さんは聡明で学校では抜群の成績だった。中学、高校と方正県で最も優秀な学校に通い、成績は常にトップの3人の中にいた。大学進学が身近に迫ってきた時、彼の第1志望は北京医科大学へ進んで医師になることだった。文化大革命に遭遇しなければ彼は間違いなく優秀な医師になっていただろう。

1966年、文化大革命が始まったとき、彼もまた紅衛兵として方正の仲間とハルピンへ出、黒竜江省の各地から来た若者と北京へ向かった。天安門広場で毛沢東に忠誠を誓った。

だが方正に帰ったあと、彼をめぐる環境は思っても見ない展開をみせる。母親・松田ちゑさんが日本のスパイ容疑で3年半も留置されたのだ。スパイの息子は昨日まで彼を敬愛していた友人からも白い目で見られるようになる。一方、1968年、「知識青年は農村へ行け!中下層農民から再教育をうけよ」という毛沢東の指示で彼も方正県のはずれにある沙河子国営農場で豚の飼育やトラクター運転の明け暮れが続いた。

農村に送られた多くの青年たちはやがて大学へ進んだり、小学校の先生になったりした。みんな高校では崔さんより成績の劣った者たちだった。ある時、崔さんは意を決し、方正へ返してほしいという気持ちを1日かけて書いた手紙を県政府に送った。母親がスパイ容疑で捕らえられていることには触れなかった。が、この手紙が県政府の責任者の気持ちを動かした。彼は方正に戻り、県政府の仕事につくことができたのだ。

■ スパイ容疑の母が釈放

それから更に半年後、崔さんにとっては永遠に忘れることができない日が訪れる。

「1971年11月25日、この特別な日を私は永久に忘れない。この日、空は雲ひとつなく、すでに冬の寒さは訪れていたが、しかし暖かい陽光が大地に輝き、人々に春のような暖かさを感じさせた。そのぬくもりは、同時に私の心をも、わが家にも広がった。この日、母が無罪釈放されたのだ。この日、私の母は苦界から完全に脱し、3年6ヶ月にわたった獄中の苦しみから脱け出し、あの暗くじめじめした、地獄のような牢獄から出てきたのだ」

■ 35年後にわかった真相

更に崔さんは、この時は知らなかった母親釈放の真相を、これから35年たって、すでに彼も日本に移り住んだ後、方正を再訪した時に、かつて方正県の公安局で仕事をしていたある退職者から驚くべき事実を知らされる。

「私の母が出獄でき、無実の罪を晴らすことができたことについて、私が誰よりも感謝しているのは、ほかの誰でもなく、またどの上部組織でもなく、中国国務院総理周恩来である。周総理の指示によって母の命が救われたのだ。母が無実で釈放されてから35年たって私が方正を再訪した時、私はかつて方正県公安局に勤め、現在すでに退職した

知人からこのことを知らされた。当時、母は捕らえられ入獄したあと、1971年10月、解放軍中国人民方正県保衛部審判係（文化大革命の期間、公安局、検察庁、裁判所はすべてすでに軍の管轄下にあった）によって決定され、省の公安庁に上げられた書類には、私の母は死刑の判決だった。この判決が省の公安庁から国家公安部に上げられ、この判決が国際刑事判決に関わるものであり、同時に日本との関係も考慮されたと考えられる。そのためこの材料はさらに周恩来総理のもとへ回された。周恩来総理は1963年、方正県で「方正地区日本人公墓」建設を認可した材料の中で、私の母が日本人公墓建設の主唱者であり推進者であることを知っていた。

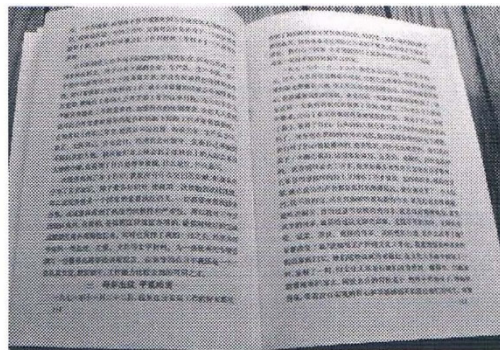
「方正地区日本人公墓」は建設後、日本国内及び全世界で大きな反響を呼んだ。これは侵略された国が侵略者の死んだ遺族のために建てた公墓である。これは中国政府と中国人民の人道主義の精神を示すものである。中国政府のこの措置は日本人民及び全世界の人民の賞讃を受けた。しかし今回、中国人民解放軍方正県保衛部審判係りが私の母を死刑にするという材料の中で最も主要な罪が「方正地区日本人公墓」の建設の上で主導的な役割を果たしたということである。そしてさらに私の母に被せられた罪名は何の根拠もないものだった。このため周総理は材料を見たあとすぐ「無罪、即時釈放」の指示を出したのである。

■ わが目を疑った地元の検察陣

中国人民解放軍方正県保衛部審判組は、1971年11月15日、この密封された書類を受け取ったとき、誰もが省公安庁に上げた母に対する死刑の書類が承認されてきたものとばかり思った。ところが彼らが開封し、見たのは「無罪、即時釈放」の文字だったのである。その場に居合わせた審判部のものは全員、驚き、わが目を信じられずに、みんな省公安庁が間違ったに相違ないと思った。書類はすぐ公安局長に渡され、公安局長は直ちに省の公安庁に電話をかけて尋ねた。答えは、これは周恩来総理の指示である。書類のように実施するように、ということだった。公安局の役人たちは狼狽し、上部からの文書にしたがって進めるほかなかった。こうして1971年11月25日、私の母は無罪釈放となったのだった。



崔鳳義さん（左）とお母さんの松田ちゑさん
（06年10月）崔さんの自宅。撮影大類



崔鳳義さんの手作りの半生記

私たちの方正日本人公墓

長田 末作（新潟県開拓民殉難者慰霊祭世話人代表）

新潟県開拓民自興会は昭和 22 年に結成されたが、会員の老齢化、資金面その他の諸般の事情により平成 7 年、新潟県開拓民自興会の名称を閉じ、以後は県出身元義勇隊会員を中心に新潟県開拓民殉難者慰霊祭世話人会の名称で、昭和 35 年に新潟県護国神社境内に建立した満洲開拓民殉難碑を守り、毎年 8 月 9 日慰霊祭を執り行うことを目的として今日に至っております。

併せて中国現地慰霊巡拝の旅を、平成 6 年より方正日本人公墓参詣を中心にして北満元開拓地を探索、探訪、現地慰霊の旅として 7 回実施してきました。

平成 11 年（1999 年）には、20 世紀締めくくりの年として「蒼き夢の地を訪ねる旅」を、元義勇隊員を中心に 44 名で方正日本人公墓で合同慰霊祭を行い、県人殉難者 5000 人の冥福を祈りました。

その都度、県下の寺院のご協力により僧侶の同行ご参加をいただき、平成 14 年以降は毎回、曹洞宗桂谷山東岸寺（岩舩郡荒川町）の住職、野田尚道老師の同行ご協力をいただき、殉難現地でのご法話、読経がしめやかに方正日本人公墓の林間にしみ渡り、参加遺族の感謝と感激の涙を誘っております。

方正日本人公墓参詣の前に、方正県人民政府を表敬訪問しその都度、副県長・張国文先生、楊桂溶先生（女性）外事僑務弁公室の田文斌先生（今は退職）、王徳君先生、陳福堂氏（退職）、王佛新氏、季宝元氏、張紅麗氏のご臨席をいただきました。他県の慰霊訪中団では現地慰霊祭の件で、中日間で多少の手違いがあったやに聞いておりますが、私どもは方正県人民政府のご理解あるご協力により毎年新潟県との暖かい交流を続けていただいております。

方正日本人公墓参詣後は参加開拓団義勇隊員の希望により、「大地の子」で有名な勃利佐渡開拓団殉難跡地（今は七台河市）、宝清事件殉難跡地、虎林清和新潟開拓団現地、密山黒台開拓団現地、甘南西宝新潟、朝陽山開拓跡地、勃利義勇隊大訓練所跡地、竜頭橋ダム見学、虎頭要塞跡地等を探訪、法要の旅をしております。

また毎回必ず密山の私の元第三次勤農新潟義勇隊開拓団跡地で地元住民、小中学校生徒との草の根民間交流、興凱湖畔散策、遊泳、国境見学等をして参加者に喜んでいただいております。

最終日はハルビン市で新潟友誼公園、極楽寺、ロシア教会堂、大和ホテル等を見学して翌朝新潟空港に帰国いたしております。すべて新潟空港発着で 7 泊 8 日、6 泊 7 日の日程で、朝ハルビンホテルでバイキングの朝食、昼食は我が家で食べられるようになりました。

今年も 7 月下旬、8 回目の方正日本人公墓参詣の予定であります。

＜長田末作さん：1925 年（大正 14 年）生まれ。40 年満州へ。19 歳で関東軍へ入隊。敗戦時は開拓団ではなく平壤で迎え、ソ連に抑留さる。47 年舞鶴に復員。14 年にわたって新潟県開拓民自興会長を務める。中国慰霊巡拝訪中暦は 7 回になる＞



左写真中央、花束を持つ長田末作さん。
その右、長く方正県外事弁公室に勤め、
多くの残留日本婦人から慕われていた
陳福堂氏もかけつけてくれた。

負の遺産こそ大切に

名取敬和（本会会員）

私は、昭和16年父母に連れられ（旧満洲）木蘭県富士見分村に開拓移民として入植しました。

当時開拓団にはトラクターなどなく、内地から徴用されてきた軍用馬を使い、北海道農法で、大きなプラウ（犁）を馬に牽かせ荒地を開墾する。馬も馬具ずれで肩や背中の皮が剥げ肉が見える、人馬共に並大抵な作業では有ませんでした。3、4年して耕地も拡大し基盤も整い、食糧を増産し、軍部や行政関係に供出していました。

しかし20年8月15日晴天の霹靂、敗戦の苦難は何処も小差はあれ大差はなかったと思います。

我が富士見分村は、ソ連軍の侵入についても団長が決死的行動で退去させ、又、幹部の英知と指導により団員が一致協力していたこと、それに天助があったからとも思います。北満の開拓地としては犠牲者も少なく、帰国者は3分の2、残留孤児は1人だけで、後日帰国しています。

九死に一生を得て帰国できた者は食うにおわれ、しかし『拓魂』により再起戦後日本の復興に大きく貢献し、今では皆安泰な生活を送っています。

私も75歳現職から離れ、過去を振り返った時、あの苦しかった開拓当時の事を思い出し、関係書籍を見はじめました。その中で北澤博史さんの自費出版『二つの祖国』～ある中国残留孤児の証言～の著者が至近に居ることが分かり交流しています。

彼の紹介を得て、貴会発行の《星火方正》～燎原の火は方正から～を拝読させていただき、貴殿が方正公墓を通じて慰霊と日中友好に、ご尽力されておられますこと知り、敬意を表します。

昭和の初期は世界的不況の時代であった。

特に日本はアメリカより経済封鎖を受け、その打開策として満蒙開拓を国策として押し進めた。

本来経済封鎖を受けた要因は、日本の中国大陸進出を阻止させる為のものであったようです。

当時日本の軍部は強行に中国大陸を支配し、日本の国威高揚を計った。

手法として満洲国（傀儡）国家を建設し支援した。支援ならば中国が主であり日本が従であるべきです。しかし五族協和、大東亜共栄圏建設の美名のもとに多くの日本人を移住させ、国土の開発と治安の維持に当たらせた。

この仕組みが満蒙開拓であった。手段として日本政府は既墾地と現地人の住居を安価で買い上げ、そこに開拓民を移住させた。しかも現地人を労働力として使用していた。

私は先日、或、県公署に勤めていた人の回顧録を見たことがあります。

日本人開拓地、朝鮮人開拓地、現地人開拓地とあり、日本の買収により現地人が反発し訴えると、役人に言い含められ渋々帰って行き、その人達の入植地が山奥の荒地で、これを称し現地人の開拓地と言っていたそうです。これが侵略でなく、なんだろうか。

移住後、開拓民は五族協和の指導を受けており、本来日本の農民は温厚な民族で、直接付き合い合う現地人とは割合信頼関係ができていました。

しかし軍部や行政が権力支配をしていた。その反発が敗戦後の略奪行為の引き金となったとも思えます。

又、一方残留孤児を育ててくれたのも開拓民との深い信頼関係があった故とも思えます。

《徳をもって恨みに報いる義挙》

中国人の寛大な国民性に敬意を表します。私は2度訪中墓参いたしました。現地の対応が温厚で、あな反省し、唯々申し意を注ぐべきと思ひます。日本本来ならば靖国神社参拝で中絶させられ逆小泉総理の靖国感情の対立を解消するため、貴殿方や他の民間団体が活動されていきますことに、感謝しております。

私は最近多発している子供の殺人事件、誰でもいい何の利害関係もない人を簡単に殺す、いじめ、親が子を殺す、尊属殺人等、常識では考えられない戦争犠牲者（特に満洲開拓）の放置された死者の怨念ではないかと言うと、同意する人が多くいます。

靖国神社参拝は否とまで言いませんが、戦犯の合祀は反対です。それによって開拓民は犠牲を払わされたわけです。併せて第2の防衛線として各戸に小銃が1丁づつ渡され、治安維持の役割を、今様に言う後方支援部隊であつたわけです。開拓の主動力であった男子は昭和19年頃より、根こそぎ召集され、又、敗戦により武装解除となり、護身の術もなく衣、食、住、全てを略奪され、因って多くの犠牲者を出すことになりました。国家はその犠牲者への追悼もしていません。

一方受難の広島、長崎の原爆禍、沖縄の本土決戦の犠牲者については国家が例年追悼行事を行い、皇族や関係大臣も参列し追悼と不戦の誓いをしています。東京都多摩にある全国拓魂碑も、今までも拓友会が維持管理、追悼行事を行なうてきました。東京都に用地が、皆高齢化し、政府にお願ひするも受け入れず、止むなく全国拓魂祭の会、会長より報告がありまして、第40回例年4月の第2日曜日に大祭が行なわれてきたが、此処2年は中止の儘となつています。このままでは自然消滅となりましょう。況して全国各地にあります碑石の維持管理も苦慮している所が多いようです。況して異国の地にある公墓の管理は大変なここの間にお任せとは心外です。国策が要因によるもので政府に大きな責任があるわけです。

『前人の過失を後世の戒めとなす』この意味において意のある人の輪を広げ国家に呼び掛けて行く必要を感じています。

文化

文化

井出孫六
(いでまごろく) さん

<1931年長野県生まれ。
『中央公論』編集者を経て、作家となる。

75年『アトラス伝説』で直木賞受賞。他に『秩父国民党群像』『抵抗の新聞人桐生悠々』『石橋満山と小国主義』など著書多数。

『終わりのなき旅「中国残留孤児」の歴史と現在』(岩波書店同時代ライブラリー)は、井出さんの故郷である長野県の開拓団を中心に、貧農排出と国防の国策が作り出した満蒙開拓団の悲劇を追求した長編ルポルタージュ作品である。

ここに掲載した井出さんの文章は、「中国残留孤児」が国家賠償訴訟を起こした事に対して、東京地裁が原告側の主張を全面的に否定したすぐ後朝日新聞夕刊文化欄に5回にわたって掲載された。

井出さん及び朝日新聞の了解のもとに、改めて読者諸氏に提供する。

転載を快くご許可くださった井出さんに御礼申し上げます。>

裁判長が書面に目を落としたまま「原告らの請求をいすれも棄却する」と、傍聴席には届かないほどの低い声で主文を読み始めた途端、記者たちが一斉に席を離れて外へ駆けだしていった。そのあと、奇妙な静けさの中で「訴訟費用は原告らの負担とする」という冷酷非情な主文の2行目が追い打ちのように続いた。



井出 孫六

老後の不安を抱える「中国残留孤児」が国家賠償を求めて起こした民事訴訟に対し、1月30日、東京地裁は原告側の主張を全面的に否定・棄却し、人びとの心を凍りつかせた。2カ月前に出た神戸地裁の判決文とこの日のものとは、天と地ほどの差が懸わになった。前者が旧満州に展開した国の歪んだ植民政策の非

を客観的に説き明かしたのに対し、後者の歴史把握は構成力を欠き、孤児発生の原因をひたすらソ連侵攻に求めるという視野狭窄を露呈した。前者が孤児の経歴に110頁を費やしているのに比べ、後者はわずか12頁ですましていくところに、立脚点の在り処が示されている。当日は法廷に入りきれぬ数百の原

告らが裁判所前に集まっていた。不当判決が知らされた瞬間、怒りを噛み殺すうめき声が空気を震わせ、耳底に刻みつけられたと、彼らとともに待っていた知人が伝えてくれた。それは戦後半世紀、父祖に代わって侵略の刻印「日本鬼子」の名を背負ってきたものの痛みだったのではなか

(作家)

耳底に刻まれたうめき声

葬列にも似た逃避行

「中国残留孤児・国賠訴訟」判決の日、東京地裁の入り口に、神戸から来た顔見知りの原告たちの姿があった。神戸判決に対する国の控訴に居ても立ってもいられず駆けつけたと、その表情にある。



井出 孫六

落胆の色はなく、むしろ冷酷な東京判決で心を閉ざしていた門が抜けたかの如く言葉が迸る。9歳の夏に突然始まった凄惨な逃避行が昨日のことのように語られるのを、私はときにミミズのようになりがちな文字でメモをとり続けた。

根こそぎ動員が父と長兄を奪い、幼い弟を背負った母に6人の兄妹がつき従う。母の背中で弟が冷たくな

った。母が翌朝、ムシロの下で冷たくなった。妹があとを追って息絶え、爆弾の破片で兄の一人もなくなる。拉古から牡丹江、ハルビンから長春へと鳥のつきまとう葬列に似た逃避行はつづき、暖かいと期待していた播磨に着いたとき、罪罪として雪が舞い、道は凍てついていた。闇の中、「水が飲みたいね」と呟った……。

(作家)

文化

文化

文化

「大地の子」の新たな旅

東京原告団の田中文治さんは身元未判明。帰国前、牡丹江市体育学校校長の頃、2度にわたり山崎豊子さんの取材を受けたという異色の人。敗戦時、推定5歳。林口県古城鎮駅に父と子が辿り着いたとき、すでに母と妹の姿はなく、槍や棒を持つ集団に囲まれ、縛られた父が撲り倒されるのを震えながら見た。

井出 孫六

こころの風景

「子供には罪はないぞ」と、集団のボスにかけあつて救い出してくれた最初の養父の勇気。半年後に預けられる2番目の養父母の王貴林夫妻の慈愛に充ちた優しさ。

「子供には罪はないぞ」と、集団の身体能力が、王少年の将来を方向づけていく。選ばれてハルビン体育学院を卒業後、牡丹江市体育学校のコーチ兼教師の道が開かれ、400メートル52秒の新記録が出た。

日本から取材に来た女性作家に、王文志校長は「私は日本人孤児ですが、中国の人々が第2の命を与えてくれました」と答えた。

(作家)

戸籍から消された名前

黒竜江省延寿県の貧農・劉銘遠夫妻は生後間もない乳子を抱えた日本婦人から3歳になる重病の幼女を引き取った。母親の残っていた紙片に「石坂万寿美」とあったことから、養女は寿美と名づけられ、劉夫妻の手驚い看護で命をとりとめた。寿美の出自を知らぬよう、劉一家は尚志県に移るが、小学校に入っ

井出 孫六

こころの風景

て小日本鬼子という形容詞がつきまとう。彼女の背は低かったが、成績は群を抜き、尚志師範に進学。養父が宝物のようにしていた中華鍋を売って洋服を整えてくれたのに、彼女は涙した。

細々と続いていた旧満州からの引き揚げは1958年、岸内閣の露骨なまでの反中国政策のゆえに途絶するが、最後の引き揚げ船で、石坂万寿美さん生存の知らせは亡父の親族に届いている。思うに、養父が山に入って採ってきた白樺の薄皮をノート代わりにして、尚志師範を卒業した寿美の名は残留者たちの間に密かに伝わっていたものか。

石坂万寿美さんの死亡宣告は日中国交回復のわずか3カ月前。まもなく寿美はまだ見ぬ母国を熱く心に思い描くことになる。(作家)

養父母の慈愛

鹿兒島原告団の団長・鬼塚建一郎さんは吉林省敦化県の收容所で酷寒の2月、実母テルさん死亡のあと孤児となり、周囲の大人たちの手で20歳と引き換えに鄭兆学、李振清夫妻に預けられた。

井出 孫六

こころの風景

満拓(満州拓殖公社)から10町歩の土地を借り、作男3人を使っていた借地農・兆学さんは、満州国崩壊

と共に一転して大地主となった。2人の娘しかいなかった彼が後継者に擬して孤児を引き取ったと考えるより、養父母とも、東に泣く子あれば……の慈悲心の持ち主だったと見た方が正しい。

子が被さるようとも、少年に向けられた養父母の慈愛は些かも変わらなかった。兆学さんは学歴ゼロの農民ながら、広い知識と品性と人格を備えていた。東北の阿Qたちは反面教師に事欠かなかったであろう。

牛の世話で農繁期、小学校に通えぬ少年に古びた中国語辞書を渡し、これを先生と思つて調べなさいと兆学さんは言った。少年の柔らかな顔に詰め込まれた漢字が帰国後の日本語習得に役だって、鬼塚さんはいま原告団団長と通訳を兼ねている。

(作家)

いま なぜ この旅を？

—消えない昨日と 迫り来る明日と—

戦争が終わって60年あまり。原爆症訴訟、中国残留孤児の国家賠償訴訟その他、その傷あとが現在もまだ大きな社会問題となっているのに、政府与党はこの歴史の現実を無視、教育基本法、国民投票法、そして9条を変える露骨な動きをいよいよ強めてきました。

いったいあの戦争は何だったのか、それをもう一度この眼で確かめ、今の日本の、アメリカと組んだ新しい戦争への企てを阻止するために今年もまた「中国・交流と歴史検証の旅」を企画しました。「方正」は戦前、国の政策で旧満州の、ソ連国境に最も近い危険地帯に開拓団として入植し、ソ連軍の侵攻をうけた老幼婦女子が死の彷徨の末にたどり着いた黒龍江省の田舎町です。しかし多くの犠牲者を出しながらようやくたどり着いたこの土地でも、飢えと寒さと疫病でたくさんの同胞が死んでいきました。そのおびただしい死者を手厚く葬ってくれ、婦人や子供たちを引き取ってくれたのが地元の中国人たちです。敗戦国日本がこの同胞を救えなかったこの時期に、それまで日本軍によって親兄弟、子供たちを何十万人も虐殺された中国の人たちが、これをやってくれたのです。戦争が終わって60年余、今もって日本人公墓が中国で許されているのはここだけです。

今回の旅は、この方正の日本人公墓を訪ねて60余年前の同胞の悲痛に思いをいたし、日本の731部隊が残した人間の非道を直視して、戦争によるこの悲劇を2度と再び繰り返すまい、国に繰り返させまいと心に誓う旅です。あらためて歴史の前に襟をただし、明日への決意を確かめる旅に出かけてみませんか。

2007年4月10日

方正友好交流の会

「中国・交流と歴史検証の旅」実行委員会

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町3-6

(社) 日中科学技術文化センター内

中国・交流と歴史検証の旅 (2007)

- 定員 15名
- 日程 6月27日(水) 集合・新潟空港ロビー 10:00
新潟空港発 12:15 (CZ616便)
ハルビン空港着 13:40 (現地時間)
宿泊=シャングリラ(香格里拉)ホテル
- 28日(木) 貸し切りバスで方正へ(高速道路・2時間半)
方正县政府表敬訪問、墓参りと日中交流
宿泊=鑫禧大酒店
- 29日(金) ゆかりの地訪問(伊漢通開拓団跡地ほか)
貸し切りバスでハルビンへ
宿泊=シャングリラ(香格里拉)ホテル
- 30日(土) ハルビン市内見物、買物(ロシア風ムードのキタイスカ
ヤ通り、太陽島、731細菌部隊記念館など)
宿泊=シャングリラ(香格里拉)ホテル
- 7月 1日(日) ハルビン空港発 9:50 (CZ615便、現地時間)
新潟空港着 13:00
空港ロビーで現地解散
※ 現地時間=日本より1時間遅れ
- 会費 120,000円(シングル希望の場合はプラス10,500円。集合、解
散か、いずれも新潟空港ですので、新潟までの交通費は
含まれていません)
- 申込み 5月25日までに下記・奥村までお申し込みください。なおその折、パ
スポート(顔写真のページ)のコピーを下記のFAXへお送りください。
- ご送金ほか
 - ①【会費の払い込み】 振込用紙をお送りしますので5月27日までに指定
の口座へお振込みください。
 - ② 新潟空港までの交通費および旅行に関わる保険料は含まれていません。保
険は新潟空港でも手続きできます。東京→新潟(新幹線・片道10,47
0円、高速バス・片道5,250円)新潟駅→新潟空港バス350円、約
30分間隔で運行。
 - ③ その他、お問い合わせはお気軽に下記へどうぞ。

方正友好交流の会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6

(社)日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411

旅行の問い合わせ: 奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

メール k.beijing6918@mx5.ttcn.ne.jp

《会員便り》

悲慘な郷土の歴史をどう伝えるか

加藤 重幸（島根県益田市）
大頂子東仙道開拓団の証を守る会

前略

永らくご無沙汰いたしました。昨年6月をお願いいたしました「貴会が所有される満州開拓に関する資料」のことにつきましてお持ちがないということで、会員の中でお持ちでなかろうかという方のご紹介を頂きましたが、そのままで頓挫させてしまいましたこと申し訳なく思っています。

そのさい申しあげました「石見郷土研究懇話会」の美都大会は8月26・27日に会員約150名で開催されました。

会では地元代表で同僚会員の寺井という方が“大悲劇に終わった「満州分村開拓と東仙道村」”と題して研究発表を行い、ロビーでは書籍や写真の展示に多大の評価を頂きました。

年末には「星火方正」第3号をお送りくださり有難うございました。

その後の私たちの活動の経過ですが、先月3月31日に「満州開拓の話聞く会」を開催しました。

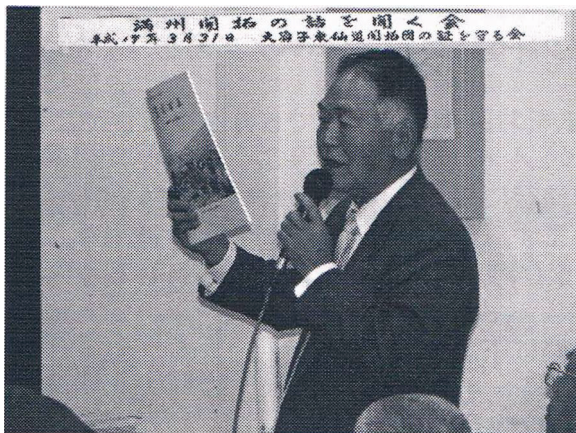
第12次開拓団として三江省依蘭県永發村に大頂子東仙道開拓団として入植し、敗戦とともに難民となって方正地区を中心に65名もの犠牲者を出した団関係者（帰還者）4名と第3次青少年義勇軍として渡満、開拓に従事された者2名を前に、一般地区民50名が当時の満州での状況について質問しお話を伺う形で3時間にわたって行いました。

これまでの帰還団員の皆さんは独自に組織内だけでの活動にとどまっていた、一般の住民の前でその様子を語ることはありませんでした。生還者の皆さんも皆80歳を越え体調不良の方、既に亡くなられた方などで、このまま経過すればこの悲慘な郷土の歴史も風化してしまうと私たち「大頂子東仙道開拓団の証を守る会」が主催して開催したものです。

今後私たちの会はどうして存続するか、何をどのような手立てでするかが課題であると思っています。

後日新年度の会費をお送りするつもりです。

方正友好交流の会の益々のご発展を祈ります。



「星火方正」第3号をもって語る加藤重幸さん



「満州開拓の話聞く会」で語る人々



当時の地図で満州を説明

昔を繰り返す事のないように

野田 良雄（新潟県上越市）

3月に83才になります。昭和16年夏17才の時、文部省の募集で「満洲建設勤労奉仕隊」に参加、6月～8月末迄、東満虎林近くの清和開拓団で生活して来ました。19才～20才の友人が多く、大方の人は戦死されたと思いますが幸い私は、兵役は内地（仙台）でしたので無事復員しました。

清和は殆ど新潟出身者でしたが、敗戦後の混乱で婦女子をはじめ、子供さんの大部分の方々が亡くなられ内地へ還った人は50人位だったと後で知りました。

数年前、県の慰霊の旅が催され、長田末作会長に申し込み、一昨年6月現地をおまいりして来ました。同行者の中に清和を知っている者は私一人、駅も建物も全く無くなり全然わかりませんでした。一面の大豆畑の一隅で祭壇をつくり法要をして来ました。その前日、方正でもおまいりして来て「方正友好交流の会」を知りました。当時を知る人が年々少なくなります。

昔を繰り返す事のない様、日中友好を願っています。第3号35頁の事務局長さんの「日本に残留し定住した中国人」と題する記事を興味深く拝読しました。お身大切におつとめ下さい。今冬は雪が少なく暖かく助かります。

引揚げ後知った開拓団の人々のご苦労

大崎 やま子（福島市）

始めまして、先日御葉書をいただきました大崎でございます。実は私、小学校五年生から終戦引揚げ迄十三年間、中国瀋陽市（奉天市）で生活して居った者でございます。当時は両親の庇護のもと、また国家の力も強かった事も有り、幸せそのものでございました。子供でも在りましたので、開拓民の方々の生活は全く知らずに居りました。

引揚げ後、開拓団の方々の大変な御苦労をやっと知ったのです。終戦後も父の友人の中国人たちに、ひと方ならぬ友情を戴き、守られて安全に引き揚げて参りました。そんな大好きな中国の言葉を最近勉強していた過程で奥村さんに出会ったのです。奥村さんが書かれた文を読ませていただき、感動致しました。また方正墓参もおさそい戴き、申し込みましたのですが、残念な事に、其の年に肺炎さわぎで中止となり同行の機会を無くしてしまったのです。

しかし、奥村さんという方は、謙虚で誠実で、奥村さんの思いに感動して賛同致した次第でございます。

私の弟も、引揚げ後、引揚げ援護会の神奈川支部に属して居りまして、弟は子供がいまないので、次々に帰国する残留孤児の家族の方々を我が子の代わりに愛し、面倒を見ておりました。

其の弟が今年の三月に亡くなりまして、多勢の帰国家族の方々が見えて、びっくりいたした次第でしたが、弟の供養にもと思った次第です。

今後も、ささやかですが、援助の一端に参加させていただく所存ではございます。一言御返事まで申し上げます。

私と方正県

佐貫 幸雄（山口県山陽小野田市）

私と方正県の関わりは方正県新興村（天門郷付近）出身の女性と2005年1月に結婚したのが契機です。いろいろ調べて日本人にとって大変ゆかりの深い地域で、公墓もその時に初めて知りました。

戦後、昭和二十五年生まれの私は戦争を知りませんがその悲惨さは分っていました。中国で731部隊を初めとして日本軍の数々の非人間的な行為。また終戦直前に日ソ不可侵条約をソビエトが一方的に破って、日本の領土（結果的に千島列島）欲しさに中国満州に進軍して多くの民間日本人がこの方正で亡くなったこと。また当時の周恩来首相の人民には罪がないとの一言でその公墓が建てられたことを知りました。

日本も領土拡張で中国に攻めて行ったので五十歩百歩と言えればそれまでです。これは謙虚に反省しなければいけないと思います。そういう意味では当時のソ連も日本も同罪ですが、当時の日本政府の国策で満州に渡った民間人も全く罪はないと言えないにしろ国に棄民されて犠牲になったことは事実と思います。

また方正県の人達も悪い人は日本の十三倍いたと思われるし、辛い目に会った方もおられると推測されますが、一方良い人も十三倍いたお陰で暮らせたので生き延びて最終的に帰国できたのだらうと思います。

二度と戦争はいけないと後世に語り継ぐことが現代を生きている私達の使命だと考えます。

あれだけ方正から日本に帰りたがっていた当時の日本人ですが、皮肉にも私は方正県で妻、義父、義母と将来暮らす計画を立てて中国語を勉強しています。

これも今が平和だから可能なことです。方正に住めば出来るだけ墓参りをしたいと思っています。

中国から送られてきた写真集『中国残留孤児』

奥村 正雄

春節の少し前、突然、中国・ハルビン市の石金楷（ハルビン市日本残留孤児養父母の会秘書長）から1冊の分厚い写真集が送られてきました。同封されてきた石さんの手紙にはこうあります。

＊

（前略）新年のあと、私は「日本残留孤児調査研究」の作者、関亜新先生、張志坤先生が送ってくれた新作写真集「中国における日本残留孤児」を受け取りました。これは中日友好の素晴らしいお話を記載した1冊であり高い学術価値と収蔵価値をもった写真集です。これを受け取ったあと、私はすぐ出版社に連絡し、買いたいのを送ってくれるよう頼みました。しかし出版されたのは1,000冊だけで、すでに発行は終わったということでした。仕方なく専門のコピー会社に連絡して一部を復刻し、記念としてあなたにお送りします。どうぞお納めください。

ハルビン市日本残留孤児養父母の会は残留孤児養父母および中国の残る孤児に奉仕する団体であると同時に、友好交流のためにハルビンに来られる友好団体・個人のためにお手伝いをする組織です。今後もこれまで通り中日友好を促進するために努力いたします。

ハルピンは美しい町です。機会があったらぜひお出でください。中日両国は一衣帯水の隣国であり、両国の人民は伝統的な友情を重ねてきました。お互いが努力し、中日両国のこれからの世代の友好を促進し民間の交流を促進するために、ともにたゆまぬ努力をつづけましょう。

2007年2月10日

ハルビン市日本残留孤児養父母の会
秘書長 石 金 楷

この分厚い「中国残留日本人孤児」（張志坤、関亜新著）は、孤児や養父母、肉親探し、旧満州時代の開拓団で遊ぶ子供たち、方正の養父母のお墓など、写真だけで266枚、これに統計数字や解説が挿入されています。全ページ、東京放送元北京市局長・岩城浩幸氏ほか
が日本語に訳していて、A4版
168ページ、定価200円。



「満洲 記憶と歴史」(山本有造編著 京都大学学術出版社)

大類 善啓



昨年の11月、「引揚60周年記念の集い〜いま後世に語り継ぐこと〜」が国際善隣協会などの主催で開催された。ほとんど「満洲」体験者と思われる人々で、会場は入りきれないほどだった。講演した加藤聖文氏(人間文化研究機構)が会場を見回し、「引揚げ体験が現実でなく、歴史になってきた」と語った。また、会場を埋め尽くした参加者に閉幕の挨拶をされた松岡満寿夫氏(本会会員・東北地区連合会会長、財団法人・満鉄会理事長)の言葉もひときわ印象的だった。

60周年の記念集会は成立したが、70周年の集会は持てないのではないかと。あと10年も経てば、満洲体験者がここに集まることは難しいだろう、と語った。参加者は確かに圧倒的に高齢者だった。

『幻の国・満洲』から引き揚げてきた人たちは高齢化し、残留を余儀なくされた人々も同じような状況下にある。体験的に「満洲」を知っている人たちは本当に少なくなっていく。

そのような中であって本書の刊行は、極めて意義深いものがある。というのも、本書に収められた論文執筆者10人のうち、8人は戦後生まれ、そのうち6人は30代の若き学者であり、その中には「方正友好交流の会」の活動を担っている南誠、猪俣祐介両氏、当会が再発足した05年6月の再編総会に参加していただいた坂部晶子さん、またつい最近『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ーハルビン市方正県物語ー』(当会が編集発行)を買い求めていただいた小都晶子さんもいらっしゃる。

京都大学人文科学研究所で行われた共同研究報告書という学術書であるため、本来は学者のような方に本書を紹介していただいた方がいいのかもしれないが、若い仲間の研究者諸君の論文を中心に、分をわきまえず紹介する。

「解放」への期待から奈落の底へ

第2部所収の猪俣祐介さん(日本学術振興会特別研究員)の論文、「想起される『満洲』ー岐阜県郡上村開拓団を事例としてー」は、郡上村開拓団として満洲に渡り、引き揚げ後、岐阜県蛭ヶ野に入植した人たちが19人に聞き取りし、その中から3人(仮名)の満洲体験を紹介している。

銃身を削り続ける旋盤工だった秀雄は、「広い所に行きたい」という動機で、「解放」への希望を語っている。周囲が反対する中での満洲行きだった。現地住民との「良好な関係」も、敗戦後は鬼気迫る表情に変貌した中国人の小作人や、ソ連兵のレイプにおびえる妻を殺して半狂乱の状態で助けを求めてきた団員の姿を、秀雄の言葉で描き出している。

文子の場合は、父の一存で満洲行きが決まった。しかし突然の敗戦は、ソ連兵による性暴力として文子に襲いかかってきた。一問一答で応えていた文子だが、この体験を話した時にはモノローグに変わっていた。

ハルの場合は、夫と3人の子供と共に団の一員として渡満。「狭い土地にしがみついているより、満洲で食糧を作った方がいい」と夫に満洲移民を勧めた。しかし渡満から1年後の1943年、次男を亡くし、敗戦後は2歳だった次女を亡くしている。

猪俣さんは、論文の最後をこう締め括っている。「文子がレイプ体験についてもらす、『それでも悔しいし、痛いし、情けないしさあ』というつぶやきは、『日本』『開拓団』『家族』といった社会との関わりでは語り得ないものである。私はそれを『満洲移民の物語』に抗う切なる訴えとして受け止め、彼・彼女らの語りを聞き取っていきたい」

小都晶子さん（大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程）は、『『南満』日本人移民とその記憶』——錦州省盤山県鯉城開拓団の『満洲』体験——という論文で、北満に入植した開拓団より、ある意味で「幸運だった」南満の引き揚げ体験を明らかにしている。敗戦時の在団者数は677人、避難してきた近隣の開拓団を吸収しながら入植地での生活を続け、1946年6月に全体の約97%を占める660人が引き揚げた体験は、それでも「逃げるのが精一杯で毒薬を所持し、いつ自決しようか、と何度も思った」体験だったが、北満の悲劇の記憶に組み込まれ「忘却」された。

「満洲国」の「土地改良事業」として入植が、植民地権力を背景とした「開発」の限界を論証している。

日本人の郷愁と中国人の記憶

上田貴子さん（近畿大学文芸学部講師）の「哈爾濱の日本人——1945年8月—1946年9月」は、ハルビン日本人社会の実像に迫っている。「満洲国」時代には、ハルビンにいるロシア人は、日本人にとっては憧れの対象であるとともに、同情の対象であったという。ソ連軍の進駐から八路軍の入城、その後の日本人遣送までを紹介している。中国共産党軍の入城が、ソ連軍の前例から危機感をもっていた日本人の予想に反して、規律が正しく好印象をもったことも記している。避難民に比して、ハルビンにいた日本人のような都市民の引揚げ体験者が少数であるが故に、ますますハルビンの記憶が、ロシアのノスタルジアに収斂されていきかねない日本人を考察している。

坂部晶子さん（島根県立大学総合政策学部助手）の『『満洲勞工』の記憶——黒龍江省東寧県の聞きとり実践』は、中国最北の省にある街、東寧での生活や経験が、日本人植民者にとってどうとらえられていたかを明らかにしている。その上で、東寧県で近年、要塞建設に働かされた労働者たちへの聞き取りが行われている。今でも現地の庶民から恨まれているのは、植民地権力を暴力的に体現していた日本人憲兵や軍人だった。

共産党であると認めさせようとした中国人労働者への憲兵の拷問。それにも屈せず、その男は最後まで共産党であることを認めなかった。その姿を、隣の家からこっそりと覗いていた中国の老人の語りが紹介され、中国社会に残された植民地「満洲国」にまつわる被害の記憶を考察していく。

第3部の「中国残留日本人」の部では、南誠さんが、『中国残留日本人』の語られ方——記憶・表象するテレビドキュメンタリー——を書いている。

南さんは、残留日本人という言葉がどのように生まれ、日本社会が残留日本人をどのように認識していたのかを、テレビのドキュメンタリー番組を手掛かりに考える。

ドキュメンタリーによる表象は、ある一定の意味へと収斂させていくために、他の意味を潜在化した

り排除したりする。その結果、残留婦人は「売られる」というストーリーに、その意味が一貫して付与されようとしているという。戦争の悲劇として表象される残留婦人は、再会の物語に変容し「感傷の共同体」が創造されていく。肉親探し、帰国運動の担い手、引揚者の記憶に回収されていく残留婦人は、「本当に記憶された、語られた」と言えるだろうか、と重い課題を突きつける。

この他にも、今後の「満洲」について示唆に富む重要な論文が収められている。最後になったが、紹介できなかった著者と論文のタイトルを明示し本書の構成を記す。ぜひご一読を勧めたい。

(定価：4,700円、税別)

満洲 記憶と歴史 山本有造編著

まえがき 山本有造

中部大学人文学部教授、京都大学名誉教授

第Ⅰ部 「満洲」1945年

第1章 「満洲」の終焉——抑留・引揚げ・残留 山本有三 中部大学人文学部教授、京都大学名誉教授

第2章 戦後中国東北における政治的正統性の源泉——「東北抗日聯軍」の記憶から「北満根拠地」へ
西村成雄 大阪外国語大学外国学部教授

第Ⅱ部 「満洲」の記憶

第3章 猪俣祐介 日本学術振興会特別研究員 (論文表題は本文参照)

第4章 小都晶子 大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程 (")

第5章 上田貴子 近畿大学文芸学部講師 (")

第6章 坂部晶子 島根県立大学総合政策学部助手 (")

第Ⅲ部 中国残留日本人

第7章 中国「残留」日本人の記憶の語り——語りの変化と「語りの磁場」をめぐって

蘭 信三 京都大学国際交流センター(兼・大学院人間・環境学研究科)助教授

第8章 南 誠 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程 (論文表題は本文参照)

第Ⅳ部 知に刻まれた「満洲」

第9章 学に刻まれた「満洲」の記憶——杉野忠夫の「農業拓殖学」

藤原辰史 京都大学人文科学研究所助手

第10章 日本人建築家の見聞と設計——建築家の「記憶」とその「歴史」化

西澤泰彦 名古屋大学大学院環境学研究科助教授

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第2回

大類善啓（方正友好交流の会事務局長）

<前回の粗筋>

遼寧省の貧しい村で 1926 年（昭和元年）、韓慶愈は生まれた。その 2 年後、張作霖が関東軍によって謀殺された。1932 年、「満州国」が成立。韓はハルビン第一国民高等学校に進学した。3 年になった時、学校から日本留学の推薦があった。母親は「負ける国に行けば殺される」と反対した。しかし父は「亡国する日本も見てきていい」と送り出してくれた。

1943 年（昭和 18 年）4 月、留学先である茨城県の大田中学に入学。校長を始めみんなは親切に接してくれた。が、戦況は悪化。1945 年、水戸も空襲された。日本の敗北は時間の問題だった。「満洲国政府」から、韓に帰国命令が下った。友との別れの挨拶もできないまま、45 年 8 月 8 日、新潟から帰国船に乗った。だった。船は出港したが、様子がおかしい。船上のマイクが「ソ連参戦」を伝えていた。その船上で日本の敗戦を知る。船は迂回して敦賀に入港。韓は、予想もしなかった日本に再び戻ってきた。敗戦の日本で食糧を求めて、東京、京都へ、そして盛岡へ。また北海道にも留学生仲間と出かけた。そこで、中国から強制連行されてやって来た中国人たちの存在を知った。

1 1、混沌とした終戦直後

労働力として暴力的に連れて来られた中国人たちだが、日本では捕虜と言われてきた。韓たちは特に他にやることもないから、彼らが住む寮にも行った。その環境は劣悪だった。板の間の二段ベッドがあるだけだ。しかし食料は豊富にあった。捕虜故に、連合軍は彼らを優遇しなければいけない。登別温泉の旅館に泊まっている捕虜たちには優先的に食料が配給されていた。韓たちはそのおこぼれに預かった。時には、白いメリケン粉で蒸しパンや餃子を捕虜たちに作ったりした。日本語がわからない彼らのために通訳をしたり、連行された経緯なども聞いたりして 2 週間ほど北海道に滞在した。

盛岡では先輩たちもいる。韓は何も心配することはないと思っていた。先輩たちに甘えていたのだ。『愛染かつら』などの映画や、大辻詞郎などのコメディアンたちが盛岡にやってきたので、その芝居を見たりして遊んで時間をやり過ごしていた。先輩たちの中には、適当に女のいる所に行ったのもいるだろうが、韓たちはなにせ中学生だ。そういう所には出入りしなかった。

進駐軍は盛岡にも入ってきた。韓は留学生の代表の一人として進駐軍に挨拶に行ったこともあった。韓たちにしてみれば、ちゃんと保護してほしいという意味もあって司令官のところに出かけた。韓たちに会った司令官たちは、「そうですか、貴方がたはチャイニーズですか」と実に紳士的だった。盛岡市内の大講堂を借りて、アメリカ軍の代表や中国人や台湾人を集めて双十節を祝ったこともあった。

韓たちはまだ中学生である。知識も情報も乏しい。しかし漠然と、中国が勝ったのだから、自分たちは戦勝国民だという意識はある。いずれ中国に帰れる船がやってくるものと思っていた。が、そういう情報は入ってこない。盛岡にいては中国に帰れる船がいつ来るかわからない、と思うようになってきた。盛岡にすることに飽きてきたこともあったが、やはり情報は早く集まる東京だと思い、翌 1946 年（昭和 21 年）1 月 23 日東京に帰ってきた。

しかし、東京も同じようなものだった。盛岡にいたときと同様、何もやることがない。韓たちは毎日

映画を見に行った。一日に2本も3本も見ろ。アメリカの映画も入ってきていた。人々は娯楽が乏しかった戦争中の反動もあり、映画館に押しかけた。どこの映画館も人でいっぱいだった。

物が無いといわれた当時でも、金があれば闇のルートでいろいろな物が手に入る。韓たちは戦勝国民ということで特配があった。着るものは陸軍の軍服が配給された。一般の兵士ではなく下士官の服である。帽子さえかぶれば日本の軍人だ。焼け跡闇市の街を、下士官の格好で歩き引き揚げてきた軍人たちに混ざっていれば、まったく違和感もなく、外から見ればまるで日本人と同じだった。

12、国民党への失望

中国大陸では内戦が始まっていた。しかし、韓や仲間たちは内戦にはまるで関心がなかった。国民党の天下になったということは疑いようもない事実だったからだ。韓もそうだが、仲間たちにしても、まさか共産党が国民党を破って天下を取るとは夢にも思わなかった。むしろ、蒋介石万々歳、国民党万々歳だった。国民党に対して悪いイメージは全くなかったのだ。日本に勝ったのは国民党だという認識である。中国人たちを日本から解放してくれたのは蒋介石というわけだから、中国人たちの蒋介石に対する人気は絶大だった。留学生の中には、にわかに蒋介石の親戚であるかのように言い触らす男も現れていた。

当時、とりたてて左翼的な思想をもっていたわけでない韓には、共産党も毛沢東もまるで自分とは関係のない存在だった。韓は、旧満州の日本の傀儡政権ともいべき「満州国」から派遣された留学生だったが、東京には他にも中国各地から派遣されていた留学生たちがいた。華北自治政府や汪精衛政府の支配下など、日本政府の影響下にある傀儡政権が支配している地域からの留学生たち、そして台湾からの留学生たちである。日本と敵対関係にあった国民党からは、留学生は派遣されていなかった。

留学生たちは、いろいろな活動を行った。台湾の留学生たちはいち早く、台湾学生同盟という組織を作った。大陸からの留学生たちは、中国留日学生同学会を作った。後に（1953年、昭和28年頃）、韓がその組織の主席になった頃は、2000名ほどの学生が組織された。しかし当時、韓は中学生ということもあり、そのような動きに関心もなく、なんとかして国に帰りたいという単純な気持ちで時を過ごしていた。

日本の敗戦前、韓は中国人なのに中国人と名乗ることはできなかった。その反動もあったことだろう。やっと「祖国中国に自分は戻れた」という思いだった。高揚した気分が自分を覆っていた。よし、国民党に入って大いに活躍してやろう。そんな心境だった。しかし、どうしたら国民党に入れるかはわからない。そのような思いを韓は先輩に話した。しかし先輩からは、「そんなことを考えるのは、まだ早い」と諫められた。

国民党から見れば、日本に留学した韓たちは、傀儡政権の連中だという意識があった。旧満州からの留学生である韓たちは、いわば「祖国を裏切った漢奸」と見られていたのだ。しかし、韓はそんなことも知らず、国民党に漠然と期待していた。

連合軍の占領下にあった日本では、国民党の中国は、5カ国で構成されている連合国の対日理事会の主要メンバーだった。中国から派遣されてきた国民党の代表団に、韓は中国人留学生の代表団の一人として会うことになった。

その時だった。中国の代表団は韓たちに対して、「傀儡政権から派遣されてきたお前たちも、傀儡と同然だ」と言い放ったのだ。韓は驚いた。その言葉は「日本のスパイ」といわれたのと同じことだった。国民党は、旧満州からの留学生を「中国の裏切り者だ」という見方を取っていたのだ。少なくとも、国民党の主流を占めていた連中は、韓たちをそう見ていた。国民党代表団から、そのことを知った韓は呆

然とし、がっくりと肩を落とした。

「やっと祖国に戻ったという喜びがあるのに、代表団に実際に会ってみると、お前たちは日本の協力者だという。よくぞ祖国に帰ってきた、と抱きかかえるかのように迎えられと思っていた」のが、まるで正反対だった。そのときの驚きは今でも忘れようと思っても忘れるものではない。それほどのショックを韓に与えた。

「だから国民党になろうとしてもなれなかった」と韓は苦笑した。留学生たちは、政治的に国民党が嫌いではなかった。しかし彼らは国民党に歓迎されなかったのだ。留学生たちをこのように扱ったのは、明らかに国民党政策の失敗だった。

韓が一番我慢できなかったのは、自分たち「国民党は解放者で、韓たちは被解放者だ」という歴然たる差別を作ったことだった。確かに、韓にも引け目があった。「日本に好きこのんでやって来たわけじゃない。しかし、貴方たち国民党が逃げたから、東北は日本に取られたんじゃないか。その責任は貴方たちにあるのだ！」そう心の中で思っている、口に出すことはできない。「満州事変の頃だって、俺はまだ子供だ。言ってみれば、俺たちは見捨てられたんだ。それなのに、今頃帰ってきて威張られる。たまったものじゃない」韓はそんな気持ちだった。

13、新米記者誕生

その頃、満州会館に留学生の先輩が作った『華光社』という出版社があった。責任者は王鍾という社長である。王は慶応大学医学部を出て、後に博士になり日本橋室町で開業医になった。「中国を救うのは体を救うことではなく、精神を救わなければならない」と、医学から文学に転向した魯迅のように、日本が負け中国が解放された時、王は大学を休学し出版社を創った。抗日戦争後の中国の発展について書いた蒋介石の『中国の運命』という本を出しベストセラーになったこともあった。毛沢東の『新民主主義論』も刊行した。日本にいる中国人向けに『華光』という雑誌も出していた。

当時の韓は、毛沢東の名前は知っていたが、毛が中国の主流、本流だと思っていたわけではない。「そういう人がいるな」という程度だった。なんといっても国民党の天下である。国民党の動きを知ることが大事だと思っていた。しかし国民党からは、「お前たちは日本の協力者だ」「民族の裏切り分子だ」と言われたのだから、いっぺんに国民党に対する温かい気持ちは冷めていった。国民党の代表団たちは、「俺たちはお前たちと違うぞ。お前たちは敗戦国の協力者だ」という。彼らとの溝はついぞ埋まらなかった。

その年は、中国の留学生組織である同学会が全国的に組織された時だった。大阪から浙江省出身の鄭孝舜が同学会の会議で東京に来た。鄭とは、かつて大阪に遊びに行き知り合いになっていた。鄭は大阪にある国際新聞の記者でもあった。国際新聞は中国語と日本語を併記して作られた新聞である。国際新聞の大阪本社は、多い時には150人ほどの人員がいた。朝刊だけの日刊紙だったが、宅配もしていた。部数は多い時で10万部はあった。社長は台湾人である。本名は康啓楷といったが、康井と名乗っていた。

台湾人は大陸の人間と違って、日本の社会に定住し、日本社会に根づいていた。が、彼は北京語も出来ず、台湾語もたどたどしかった。当時、新聞は新聞紙の配給がもらえた。康は、サンケイ新聞を作った前田久吉と組んでいた。新聞紙を当局からもらい、それを闇に流せば莫大な金が入る。人々が活字に飢えていた時代である。紙は貴重品だった。社長はその紙を横流して儲けることが狙いだった。しかし、そこで働く中国人や日本人たちは違った。やる以上は立派な新聞を出そうとしていた。

鄭もそのような一人だった。その鄭から韓に東京支社の記者をやってくれないかという話がきた。中

学も出ていない韓にとって、記者の仕事は興味はあったが自信はない。見習い記者なら出来るかもしれないと鄭にいうと、それでいいという。その時、韓はもう一つ要望を出した。中国へ帰る船が来たら、いつでも帰国させてほしいということである。

韓は1946年（昭和21年）の春から国際新聞社で働いた。国際新聞社は、有楽町にあるサンケイ新聞社の中にあった。編集関係は中国語の出来る韓と、もうひとり日本人がいた。総務関係が二人、広告関係は3人いた。編集にいた日本人はベテランだった。相性も合ったせいもあるが、とても親切で、韓は誠心誠意つき合った。給料も少しが出た。

しばらくすると、記者としてやっていけそうだと韓は認められた。韓は、日本にいる国民党関係の担当になって、在日中国人の動きを追い中国代表団取材した。

祖国に帰りたいと思っていたが、中国へ帰る船は来そうにもない。帰国する船はないと韓は思っていたが、実は船はまるでなかったわけではない。強制連行された中国人たちは帰国していたのだ。情報の取り方に問題があったのだらうと、韓は当時を振り返って思っている。

14、東工大へ入学

かつての仲間たちは学校に通いだした。復学する者、新たに進学する者もいた。韓は一人取り残された感じだった。韓は鄭に相談した。自分は中学も卒業はしていない。ちゃんとした仕事にも就けられないと話した。すると鄭は、関西学院に行ったらどうかと言い出した。関西学院大学の社会学部に新聞学科があった。鄭自身が関西学院の出身者だった。

戦争中、毎日新聞社から大陸向けに『華文毎日』という中国語の雑誌が発行されていた。韓も購読していたが、鄭はその雑誌の編集者でもあった。鄭は頭が良く、国際新聞にはなくてはならない存在だった。韓より一つか二つほど上だったが、戦後関西学院に正規に入学していた。華僑の二代目である。父親が先に来ている、鄭を呼び寄せたのか、詳しいことは韓も知らなかった。鄭もそのあたりのことはあまり触れたがらなかった。

当時、関西学院には美学を教えていた張源祥先生という中国人の教授もいた。鄭は韓に、聴講生でもいいじゃないかという。どういう形であれ、韓は勉強ができればいいと思った。学問もないのに新聞記者の見習いをやっていても先が思いやられる。そうして韓は、鄭の推薦で関西学院の聴講生になるという話が決まった。鄭は本社に掛け合ってくれ、韓は本社の整理部部長の辞令をもらった。一遍に韓の下に15、6人の部下ができた。大学にも週に2、3回は行っていいということになった。

1947年（昭和22年）の4月、韓は担当の教授に会い大学に通いだした。しかし中学も出ていない韓には、大学の授業は歯が立たなかった。先生がいきなりドイツ語を引用するのだ。これではとてもじゃないがやっていけないと韓は思った。関西学院には結果的には半年も通わなかった。

東京裁判が始まろうとしていた。韓は国際新聞の記者として、東京裁判の傍聴カードを持っていた。世紀の大イベントである。韓は裁判を傍聴したいと思った。東京に戻れば、飯田橋にある後楽寮に住める。飯田橋は都心だ。そこからはどこに出るのも便利だ。それにひきかえ、関学に通いだした時は奈良に住んでいたから、大阪に出るのも大変だった。近鉄に乗って上六に行き、それから市電で通う。「早く東京に戻りたい」と韓は思った。編集長の台湾人は「そんな我儘は聞けないよ」と言ったが、結局は許してくれた。

韓は東京に戻ると、大学に入ろうと受験準備を始めた。1947年（昭和22年）の夏の終わりの頃である。受験資格が微妙だったので、茨城の大田中学の校長に相談した。校長はとても面倒見がよく、

「中学卒業と同等の学力なら大学も受験できます」と請け負ってくれ、同等であるという学力証明書を出してくれた。

大学では社会学をやりたかった。新聞記者として生きるにはそれが一番だと思ったのだ。ところが仲間の連中にそのことを話すと、「実情を見ろ。我々のような出身者は、今の国民党だと未来永劫、重用されることはない。文系へ行くより技術をやれ。技術をやればどういう時代でも食える」そう諭された。いずれ国へ帰ることを思うと、韓はそれもしようがないかと思うようになった。そこで理系に進もうと受験勉強に精を出した。数学、理科、化学、英語などの試験はあったが、なんとか東京工業大学予備部に入学することができた。1948年（昭和23年）のことである。翌年には学部編入された。専攻は建築科である。

大学に入学すると昼間の仕事ができない。そこで国際新聞の東京支社長の紹介で、国際新聞を辞めて、国民党の中央通信社の編集スタッフになった。国際新聞は、韓が退いてから、最後は結局『新夕刊』に身売りされてしまった。

15、憂鬱な時代

韓にとって1946年から48年までは、憂鬱な時代だった。日本に留学に来た学生というだけで、国民党関係者につまはじきされた時代である。「国民党の統制下では、うだつが上がらないよ」と友人に言われていた。それなのに、人文科学の方に飛び込む奴があるかと先輩たちに言われて東工大に進学した。

当時韓は、共産党が中国で政権を取れるとは思わなかった。ところがある時から、ひょっとしたら共産党が勝つかも说不定、と思い始めた。

国民党管轄の通信社といえどもニュースを扱う通信社である。情報はどんどん入ってきた。韓の田舎である中国の東北で「国民党が惨敗」という情報や、南京から入るニュースは、苦戦する国民党を伝えていた。

当時のニュースは、トンツートンツーと音声で送られてくる。それを聴いて数字に書き出す。その数字を、アルバイトの日本人学生が碼電という字引（コードブック）を引いて漢字に直していく。韓は、音声を聴いている段階で数字が間違っていることに気づく。コードブックを引いて書き出す時にも間違いが生じてくる。二重のミスが発生するのだ。そのミスを、韓たち編集者が見つかる。誤りが多い文章を、韓たち中国人が普通の中国語に直して見出しをつける。それを日本の新聞社などに配信する仕事は夜の6時から始めて、明け方の3時か4時に、ようやく終わる。

そうやって時間を遣り繰りし、なんとか昼間は大学に行けた。通信社での待遇も悪くはない。当時の中国は、連合国の一員である。食べ物にしても特配など待遇を受けられた。日本のビールは高かったが、アメリカのビールは安く、韓たちはビールといえばアメリカのビールを飲んでた。

中央通信社は、当時有楽町にあった朝日新聞社の6階にあった。その後、日比谷の市政会館にある共同通信社に移ったが、時々刻々、国民党と共産党との戦況のニュースが、いやというほど入ってくる。

共産党の八路軍は南下、アメリカの武器で装備された800万の軍を八路軍は破りつつあった。国民党は負け続けていた。国民党は人心を掴んでいなかったのだ。ひしひしと共産党の力を韓は感じていた。しかし、国民党は法螺を吹いて勝っているように情報を脚色してニュースを流していた。その裏を韓たちは読んでいく。その頃から、国民党の嫌な面を見せつけられる。その一つは賄賂だった。

国民党の連中と一緒に仕事をしていても相性が悪い。彼らとは水と油だということがわかってきた。と同時に、共産党に徐々に好感をもつようになっていった。国民党は配信する記事の中で、共産党のこ

とを「共匪」と書く。その「共匪」という字を、韓たちは「共産党」に直していく。本国から来ている国民党の責任者は、昼間は事務所にいるが、夜になると帰ってしまい誰もいなくなる。夜は韓たちの天下になった。

おのずと韓は、国民党の連中からは中共派と見られるようになっていた。戦況は次第に国民党が劣勢に追い込まれていた。通信社にいる国民党の幹部たちも、だんだん自信を喪失していく様子が明らかにわかってくるのだった。

国民党は南京を追われ、広州を追われ、そして、遂に台湾に逃れようとする時期に来ていた。

韓はこの時になって、新たな姿勢を明らかにしなければと思った。「中央通信社は、国民党のものというより、中国人民のものである。共産党ということではなく、新しい政府の代表が来る前に、我々は財産を管理する義務がある」。韓はそう打ち出した。蒋介石が台湾に移る前後である。通信社の幹部たちも、いつ国民党政府が潰れるかわからない情勢だから、韓に圧力をかけることもできない。

通信社で働く日本人も、韓に対する反発や反感はなく、韓に対して一目置くようになり、好意も感じられるようになってきた。その根底には、新しい政府の代表が来た時に、日本人である自分たちも仕事ができるようにしておこうというしたたかな計算もあったろう。経営者である国民党の責任者と韓との対立の中では、中立の立場を取る日本人が多かった。

16、新中国誕生

1949年（昭和24年）、ついに新中国が成立した。日本が敗戦した直後は、天下を取るなど夢でさえ思わなかった共産党が激しい内戦の末、とうとう勝利したのだ。韓は、鬱積した重い感情が一遍に解き放たれたような気持ちだった。

在日華僑の組織は、一斉に新政府を支持する電報を中国に打った。日本のほとんどの政党が冷ややかに見る中で、新中国を全面的に支持したのが日本共産党だった。中国に亡命していた日本共産党の野坂参三は、1946（昭和21）年には延安から帰国していた。

戦後すぐ、18年間も獄中にいたという日本共産党の指導者がいたということを知った時、韓は本当に驚いた。

日本に留学する前の旧満州では、「共産党は悪魔だ」という宣伝が行き届いていた。ハルビンにいた時は、「これからの中国を救うのは、毛沢東や朱徳だ」といった宣伝や読み物があり、ロコミのように中国共産党のことが伝わっていたことはあった。しかし、韓は中国共産党が行った「長征」のことも知らず、共産党に対する悪い宣伝の影響を受けていて、自分の思想形成に毛沢東や朱徳が繋がらず、中国を後にして日本にやって来たのだった。

日本の敗戦、国民党に対する幻滅を味わって、やっと共産党というものが韓の内部に入ってきたのだ。心を開いてくれた日本共産党の方針を知って、韓はこれなら日本共産党と共にしても大丈夫かなと思うようになった。確かに、日本人にもいい人はたくさんいた。しかし、軍国主義者も大勢いた。国民党は、「お前たちは日本の協力者だ」と言い、韓たちに同情してくれる人たちは周囲には少なかった。

しかし、大陸で共産党政権は樹立されたが、国民党は潰れなかった。台湾に逃げてからは、アメリカと日本政府が、国民党にてこ入れをしてきたのである。

ここに来て韓たちは、新中国の国旗である五星紅旗を中国代表団の庭に揚げさせようとした。が、それは失敗した。韓は、中央通信社が新政府に接收されることを望んだ。しかしアメリカ政府が干渉してきた。韓は社を辞めさせられた。韓は「共匪」なのだ。

すぐに韓は、「我々は新政府を支持する」と声をあげ、中央通信社の財産を守ろうと、日本人社員に

対して接していった。エディ曾というアメリカ風の名前をもった国民党の通信社代表は、韓の行動に動揺したが、結果的には韓の方が浮き上がってしまった。

通信社には国民党代表団の2代目の団長がやってきた。国民党の中の特務が、通信社の中には「共匪がいる」と団長に告げ口する者もいた。ある時、曾支社長がこう言ってきた。「韓先生、貴方は国民党に反対しても日本に居ることはできるが、我々は場合によっては殺されるかもしれない」と哀願し、人を介して穏便にしてほしいと退職金をもってきた。韓はそれを機会に通信社を離れることにした。

新中国ができて翌々年、韓は中央通信社を辞めた。中央通信社には、1948年から1951年までの3年間いたことになる。韓が辞めると知った鄭孝舜は、すぐ国際新聞に戻ってこいと言ってくれた。まだ大学も終わっていない韓は、鄭の「囑託でもいい」という言葉に従って戻ることにした。

17、盛り上がる学生運動

入学した東京工業大学の最初の1年は、外国人のための予備教育だった。学生としての韓は、5月頃から学生運動に加わっていった。学生運動の統一組織である全学連（全国学生自治会総連合）は、前年の1948（昭和23）年9月に成立していた。公立私立の大学145校が全学連に加盟していた。戦後日本学生運動の最初の勃興期である。しかし東工大は全学連に加盟していなかった。韓は友人たちからクラス委員になれと言われ、いつのまにか学生運動に入っていた。「東工大はなぜ全学連に加盟しないのか」とアジ演説をしたこともあった。

当時、東工大では60人ほどの留学生在学していた。留学生たちは、大学祭では演劇を行い、スポーツではテニス、野球、ハイキングなどをして青春を謳歌していた。しかし、なんといっても活動の中心は、中国語（普通語と呼ばれる標準語としての北京語）の講習会である。主な対象者は、台湾出身者と日本生まれの華僑の学生である。彼らはほとんど中国語が喋れなかった。韓は、王毓聲、周元寶と共に講師になって彼らに教えた。

この頃から、韓の思想にも大きな変化が生じていた。戦争中でも反戦活動を行っていた日本共産党にシンパシーをいだくようになっていた。成立したばかりの反戦同盟にも入り、ピラ配りもやるようになっていった。

留学生たちも、戦後の国共内戦などを巡る新しい動きにどう対応するか、大きく分かれるようになっていった。しかし国民党についていくのは少数だった。9対1ぐらいの割合で、大陸からの留学生たちは圧倒的に中国共産党を支持していた。

台湾では、大陸から台湾に渡った国民党の軍人や警察などのいわゆる外省人といわれる人々が、台湾人（本省人）を横暴に扱い、台湾の人々に嫌われていた。

そして、1947（昭和22）年、世にいう2・28事件が起こった。闇タバコを売っていた老婆を殴った外省人の警官に対して、台湾人たちの日頃の鬱憤が堰を切ったように爆発した。台湾人たちが怒りだしたのだ。驚いた蒋介石の警察は、狂気のように弾圧に乗り出した。

この2・28事件は新聞にも出た上、周囲にいた台湾人からも、その凄まじい弾圧の様子を韓は聞いていた。

2・28事件は、蒋介石をリーダーとする大陸からの政權に、台湾の民衆がはっきりと見切りをつけ決別を誓った衝撃的な事件だった。「犬（日本）が去って、豚（蒋介石一派）がやってきた」と、台湾の人々が蒋介石政權に一切の幻想をかなぐり捨てた政治的な事件だった。台湾に帰国した留学生の中には、再び日本に戻った人もいた。また密かに香港経由で大陸に渡った人もいた。

小説を書き、金儲けの神様として一世を風靡した邱永漢もその一人だった。彼は香港に逃れ、日本に

密入国した一人だった。

韓は、2・28事件は国民党の台湾人に対する差別の表われだと思った。それは、自分たちを差別した精神と根っここのところにつながっていると思い、いっそう台湾の人たちへの同情心が育っていった。

元留学生の中にはこういう人もいた。彼は、日本の敗戦前に日本人の妻を連れて中国の東北に帰国した。そこでは、国民党と共産党が戦っていた。彼はその時、国民党側についた。彼には、「共産党は怖い」というイメージがずっとついていたのだ。国民党が東北を支配した時、国民党が日本人を管理するスタッフを募集した。その時彼は応募し採用された。そして中尉になり任官した。

しかし、徐々に国民党が、日本に留学していた出身者を重視しない方針であることがわかってきた。と同時に、中国に残留する日本人居留民を調査する仕事が彼に回ってきた。日本人の妻をもつ彼は、気がではなかった。日本人に対する差別もあり、どう対処していったらいいのかわからなくなってきた。彼は、中国から引き揚げる日本人たちにまぎれて再び日本に戻ってきた。彼以外にもそういう例があったという。戦前に日本に留学した人たちは、このように何人もが波乱に満ちた人生を送った。

18、始まった日中友好運動

韓は東工大の学生である一方、嘱託として国際新聞の記者生活が再び始まった。国際新聞は、世間では在日中国人所有の新聞という認識があった。韓は国民党の担当だったので、よく国民党代表団の事務所に行った。国民党の規模も大きくなり、政治部、経済部、文化部が設けられていた。韓は、国民党代表団と国際新聞のパイプ役になっていた。

しかし政治的には中国共産党を支持していた。日中友好運動も徐々に進んでいた。すでに新中国が成立する前に、日中貿易促進会ができていて、その創立大会が日比谷公会堂で開かれた。この貿易促進会は日本共産党が押さえていた。友好運動の主要な部分を担う日中友好協会は在日華僑の協力の下に成立していた。事務所は丸ビルの4階にあった。事務所の所有者は華僑連合総会だった。

日中友好運動も当時は、日本共産党のイニシアティブの下にあった。韓は東工大で学生運動をやり1952（昭和27）年日本共産党に入党した。党に入党したのは理論的に納得したというより、人々との関係からだった。学生運動をやっている仲間が、「お前も入れ」というので入党したのだ。入党には人の紹介者が必要だった。韓は秘密党员だった。入党してみて、いろんな情報網があるのがわかった。これは入党する前のことだが、1951（昭和26）年11月、飯田橋にあった後楽寮の韓のところにいる学生の何人かが中共のスパイだといって警察が捜査した。表向きの捜査は関税法違反容疑という名目だった。

明らかに不法捜査である。200名の警察官に後楽寮は包囲されたが、捜査される前に警察が入るという情報が入っていた。その情報は日共の情報網からもたらされたものだった。事前に捜査されなかったから、韓たちの仲間たちは、共産党や中共の本は隠していた。事実は中共とは関係のないとだった。この事件は、三大新聞の夕刊社会面に三段の記事になった。韓たちにとっては迷惑千万な索だった。韓たちは、すぐに警視庁に抗議をした。

日共の党员だったという話を私にした時、韓は「こんなことを言うのは実は君が初めてだよ」と私言った。「最近まで女房も知らなかったことだ」と言うのだった。

当時の日本共産党は、中国共産党と連携していた。当時の日本共産党の考え方は、華僑は日本における少数民族として位置づけていた。韓もそのため、少数民族委員会に属したが、党员としての生活は年ほどの短い期間で終わった。

1954（昭和29）年頃、日本共産党と中国共産党は話し合った。中国は対外政策として革命は

出できない。党員の義務活動として日本で革命運動に従事すれば、内政干渉になり革命の輸出になる。それは、中国の国策にはならないというわけである。両党の合意の下で、華僑は日本共産党から離脱するよう指令があった。

19、高まる華僑帰国運動

1953（昭和28）年、韓は華僑の学生組織である同学会の主席になった。副主席は蕭龍光だった。蕭は後に、韓が興した株式会社向陽社の社長になった。ほぼ30年後、向陽社は新しい開放経済体制に入った中国に向けて輸出広告を扱い、その扱い高は中国に限っていえば電通や博報堂を凌ぐほどになり、手塚治虫の『鉄腕アトム』などのアニメーションを日本企業のCMをつけて中国中央電視台で放送した。これについては後で詳しく紹介しよう。

さて、新しい中国人民政府に対する留学生たちの信頼は高まるばかりだった。新政府は、1957（昭和32）年まで生活に追われて勉学できなかった学生たちに学費の援助も行った。その受給者たちは、大陸や台湾出身だけでなく、日本生まれの華僑の学生も多数含まれていた。

新中国からの学生への援助は、学生たちに学習への意欲を高めるとともに、新中国に対する親近感を増した。それとともに、学生たちの中から祖国に帰ろうという帰国熱が高まっていった。

すぐに帰国して新中国の建設に参加すべきだという意見も出てきた。更に専門知識を深めてから帰国すべきだという考えも出てきて議論は噴出した。中国からは、「貴方たちが学習と学術の研究工作中に更に努力されるよう我々は希望する。かつ、専門の学業を終えた学生は一日も早く帰国し、国家の建設に参加されることを歓迎する」という手紙が送られてきた。

1949（昭和24）年の末には、中国の教育部（日本では文部科学省に当たる）の指導下で、北京に「留学生帰国事務処理委員会」が成立し、帰国学生のための準備が整いつつあった。すでに帰国した仲間からは、帰国の心構えや帰国者への要望をしたためた手紙も日本に来ていた。

そこには、「中国には何でもあるから、荷物はなるべく少なくしろ。学習については、実際に役立つものを学んだ方がいい。例えば、統計経済、工場管理、原価計算など、理科系は工場実習と見学が一番だ。卒業証書は必ずしも必要はない。革命大学に入り、半年または8ヶ月勉強したら仕事につくことができる」などということが詳しく述べられていた。

1972（昭和47）年の日中国交回復交渉で周恩来首相と田中角栄首相との会談で通訳を行い、帰国華僑で一躍有名になった林麗韞からは、次のような手紙が日本の同学総会に送られてきた。

「1952（昭和27）年11月24日、北京大学生物学部に入學。入学式当日は大変賑やかで、先輩たちが各学部別に新入生を迎えてくれ、入学手続きをとってくれたり、宿舎に案内したり、親身になって世話してくれた。11月29日、学生会の主席が最初に立って、北大（北京大学のこと）の新しい血液を歓迎し、新しい仲間を歓迎する、と開会の言葉が述べられた。演劇、合唱、民族舞踊など盛り沢山のプログラムが演じられた。みんなの希望で私は日本の歌を歌った。北京大学は、建設人材を多数養成するために、人民政府は在学生一人につき、毎月200余元（人民元）を支出し、学費、食費、設備費、医療費に当てている。私の同室にはインドネシアから来た華僑の娘さんが一人いる。校内には医院、理髪室、郵便局、浴場などの設備がある」（華僑運動史）と記されていた。

帰国した先輩から、次々に同学総会や各地の同学会、学生個人に手紙が送られてきた。そこには、新中国の事情が詳しく綴られ、帰国を呼びかけていた。郭沫若副総理兼中国科学院院長からは、政府を代表して留学生の帰国歓迎の呼びかけも行われた。

20、ひとまず舞鶴へ

いやがうえにも帰国熱は更に高まり広がった。留学生はいうまでもなく、一般の華僑からも帰国希望者が増えていった。しかし、帰国船がなかなか用意できなかった。

一般の華僑、学生の帰国希望者1,000余名は、帰国船を待っている状態だった。韓もその一人だった。

留日学生の帰国は、三つの段階に分けられる。第1段階は、1950（昭和25）年から1952（昭和27）年である。新中国が成立してから、1952年までに帰国した留学生は300余名に達していた。この期間、留学生はそれぞれ個別に帰国していった。前述の林麗韞は、この時期に帰国した女性である。彼女は台湾出身の神戸華僑だった。

第2段階が、1953（昭和28）年から58年、留学生と華僑は集団で帰国することになる。第3段階は、1956（昭和31）年以降、留学生ら知識分子が帰国していった。しかし、華僑の帰国運動は順調に推移していったわけではない。

1951（昭和26）年9月、対日講和条約が調印された。翌年の4月、台湾の蒋介石政府と日本政府の間で、日華平和条約が調印された。帰国運動は蒋介石政府の要請によって圧力をかけられ、押さえられたのだ。日本やアメリカの保護の下で、反共、反中国を標榜していた台湾は、「華僑が大陸に帰ることは許せない」と陰に陽に日本政府に圧力をかけた。

中国大陆に帰るということは、大陸の新政府を擁護することになる。台湾にとっては面白くない。蒋介石政府にとっては、逆撫逆撫するような行動に見えたのだ。

韓たちはそれに対し、「帰国運動」を組織した。国会にも陳情した。当時、田村町にあった外務省に押しかけ、岡崎勝男外務大臣の執務室の入り口で、100人ほどが座り込んだ。その時、韓は指揮者だった。1953（昭和28）年5月のことである。

留学生や華僑の青年たちは警官にごぼう抜きされた。学生たちは、大通りに出て「団結は力なり」や中国国歌を歌い、新橋の華僑総会までデモ行進をした。韓たちは、ことの顛末をすぐに中国政府に打電した。

北京放送でも、華僑たちの帰国を歓迎する呼びかけが行われた。しかし、日本政府は台湾に気兼ねして、華僑が大陸に帰ることに反対した。その動きを知った中国政府は、日本政府がそのような態度を取るなら、「残留する日本人の帰国についても見合わせる」と表明した。この中国の動きに日本政府は驚き、翌日折れて華僑の帰国に同意した。

日本政府から帰国運動を勝ち取った華僑の青年たちのために、勝利に勢いづいた中国から帰国した日本人たちが、専用列車を出すことを要求した。残留日本人が帰国する時には、中国政府は専用列車を用意したのだ。それに倣って、専用列車を出せということになった。このことについては、華僑たちはおとなしかった。しかし日本人たちが、日本政府は何故、中国人たちを冷遇するのかと怒り出し、夜9時に発車するのを拒否したのだ。やっと夜中の12時頃に厚生省が折れ、専用列車に乗ることになった。舞鶴には、翌日の午後4時に着いた。

ところが舞鶴に着いたら、泊まれるはずだった旧日本軍人の寮に帰国者以外は泊まることができない、と言われ渡された。面会も駄目だというのだ。今度は専用列車に乗ってきた華僑たちが騒ぎ出した。中国人に対する今までの差別に、我慢しきれなかったこともあっただろう。その上、今までの勝利に自信もついてきた。1日ほど頑張った末、これも勝利のうちに終わった。

21、やっと天津へ

韓は舞鶴まで同行し、そこから帰京するつもりでいた。できれば第3次の船で帰国する予定だった。

ところが乗船代表を乗せるということになった。同行していた日本人たちが、「自分たちが中国から船で帰国した時には、乗船代表というのが乗っていた。今回の乗船でも、やはりそれに倣って、中国人の代表を乗船させないのは中国人差別になる」と言い出したのだ。

またも難題が浮上した。そういう事態になろうとも思わず、乗船代表は決めていなかった。が急遽、学生代表、華僑総会の常務副会長、大阪の華僑代表が、それぞれ乗船代表ということになった。韓も乗船代表ということになって帰国船に乗ることになった。

厚生省は困ってしまった。船員手帳がないと乗れないというのだ。韓たちは急いで船員手帳をもらって乗船することになった。着替えも用意していない。簡単に物が手に入る時代ではない。韓は慌てた。乗船するつもりはなく舞鶴まで見送りに来ただけなのに、興安丸に乗って天津まで行くことになったのだ。

ところが、またも問題が浮上した。かつて日本は強制的に中国人労働者を連れてきて、炭鉱などで労働させた。近年、花岡事件としてマスコミでも脚光を浴びる強制連行の被害者たちである。その「被害者たちの遺骨をもって帰ろう」ということになったのだ。遺骨を中国に持参しないと、祖国の人たちに顔合わせできないと言い出したのだ。

そう言っても、これはすぐできるものではない。当時は船が1日停泊するだけで60万円はかかるといわれていた。日本政府は興安丸を借りていたのだ。維持費、船員の費用などに莫大な金がかかる。日本政府は慌てた。そして話し合いがもたれた。結論は、新たに黒潮丸を雇って、1週間以内に遺骨を送るという約束が成立した。結果的に舞鶴には5日ほどいることになった。

1953年6月27日、紆余曲折を経ながらやっと、最初の集団帰国船が舞鶴を出た。留学生と華僑551名を乗せた興安丸は、天津へ向かった。帰国する華僑は、大陸出身はもちろん、台湾の出身者もいた。年齢制限はなく、高校2年生という少年もいた。

その年の3月、東工大建築科を卒業した韓は、帰国する華僑と学生の世話をするため、「乗船代表」として、東京華僑総会の陳焜旺副会長とともに船に乗り込んだ。当時、同学総会の主席だった韓は、新中国になって初めて祖国に向かったのである。

7月1日、興安丸はやっと天津湾新港に入った。帰国者たちはそこで下船した。塘沽から天津まで、特別列車で1時間以上もかかって天津駅に着いた。

22、廖承志との運命的な出会い

天津で歓迎集会が開催された。華僑たちは、日本での職場を辞めた者、自営の商売をやめて帰国した者などもある。ほとんど興奮状態である。廖承志はわざわざ北京からやってきた。しかし、関係者以外にはこのことは秘密だと韓も口止めされた。廖承志は対日政策の責任者であり、重要人物ということで中国側は秘密にしていたのだ。

帰国華僑の中には、天津に親戚の家もあったろうが全員、中国側が用意した宿舎に入った。当時は、日本に引き揚げる日本人も天津に集結していた。彼らは天津ホテル、第一ホテルなど三つあった天津の一流ホテルに滞在していた。帰国華僑たちは、そのため政法学院という大学に臨時にこしらえた宿舎に入った。そこではベッドが備え付けられていた。

韓に当時の天津の印象を聞くと、意外にも賑やかさは日本以上だったようである。出された食べ物は豊富だった。韓は北京にも行きたかったが、時間がなかった。日本での闘争で中国に着くのが遅く、帰国船を拘束するにも経済的に負担がかかったからである。

韓の宿泊場所は、招待所だった。当時の幹部クラブである。そこで韓は廖承志と運命的に出会うこと

になった。韓は、在学中は同学会の主席だったが、卒業したその年の夏には主席を辞任するつもりで秋には帰国しようと思っていた。当時は、一月半に1回、帰国船が出る予定だった。

廖承志といっても知る人ぞ知るという存在で、韓には特に認識はなかった。廖は日本から3人の代表と会見した。一番若い韓の番になった時、廖は言った。「韓慶愈、ご苦労さん。それで君はこれからどうするつもりだ？」

廖承志の質問に、韓はここぞとばかり、「第3回目の帰国船に乗って帰国し、祖国の建設のために働きます」と言った。ところが、廖は渋い顔をして、頭を縦に振ろうとはしない。「そうか。それはいい!」。そう廖から答えが返ってくるものばかりと思っていた韓は、やや驚き緊張した。何か悪いことでもしたのだろうか。間違いを犯したのだろうか。「祖国に貢献したい」と言っているのに、廖はまともに受け止めようとはしないのだ。

廖は韓に尋ねた。「君は確か新聞記者をやっていたんだね。国にみんな帰ってしまったら、華僑の面倒は誰が見ますか」

韓は戸惑った。「誰が見ますか」といわれても、どう答えていいかわからず、思いめぐらした。「留学生は誰もが帰る。当たり前のことじゃないか」。韓は心の中でそう反発した。しばし時間が流れた。数秒だったかもしれない。そのあと、廖はこう言った。

「実は日本で中国語の新聞を出してもらいたいと思っている。それを君にやってもらいたいんだ」

その一言で、韓の帰国の願いは消えた。韓は、自分の身を嘆き悲しんだ。

暁部隊の輸送船団に乗って帰ろうとしてから8年が経っていた。苦労しながらも、やっと大学も出た。国民党ではなく、祖国と共産党の政府に自分も尽くせる。新中国のために働こうと張り切っていた矢先である。

廖承志と会う前に、廖の下にいる陳曼雲、楊春松、庄希泉らと、今後の対日関係について長時間話した。廖は、いろいろと話し合った彼らの前で、そう韓に語ったのだ。

共産党の政府になってから、党の呼びかけには応えていこう。党が勧める所に行くのも、ひとつの使命だろうという考えは前々から韓にあったことは確かだった。韓は、そのことを思い返した。廖にそう言われたことは、新中国の政府に信頼されていることでもある。そう思った瞬間、韓は「やってみます」と答えていた。

実際に帰国しようとしたがなかなか実現できず、10年という歳月が流れていた。最終的に国へ帰れるというまさにその時、青天の霹靂のように新たな使命が韓に下ったのだ。

韓はこの話をした時、「我ながら、よく決断したと思った」と述懐した。そうして、「今考えれば、あのまま中国に帰っていれば、文革の時は大変だったろう。それを考えると本当に恐ろしいよ」と呟くのがあった。

廖はその後、君たちを北京に連れて行ってやりたいが、これまでも日延べもしたし、また延びることになる。日本政府も困ることになるだろう、と語った。韓たちはそのまま、天津から興安丸で日本に戻った。

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

——「方正友好交流の会」へのお誘い——

中国ハルビン市郊外の方正県に、日本人公墓が建立されているのをご存知でしょうか。

1945年の敗戦のさなか、祖国を目指して逃げ惑った旧満洲の開拓団の人々は、難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が、この方正の地で息絶えました。それから数年、累々たる白骨の山を見た残留婦人が骨を拾い集めました。そして力を貸した中国人たちが集めた遺骨はおよそ五千体ともいわれています。

その人たちを祀るお墓が「方正地区日本人公墓」です。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれ、公墓が建立されたのです。多くの日本人開拓団員たちが犠牲となった旧満洲で建立されている公墓は、この方正にあるものだけです。

（黒龍江省麻山地区でソ連軍の挟撃に遭い、四百数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正公墓の隣にあります）

この公墓の存在は、残念ながら一部の関係者にしか知られていませんでした。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を多くの人々に知ってもらおう、そして維持管理の面でも日本が協力して活動していこうと設立したのが「方正友好交流の会」であります。この日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てることができればと活動を続けています。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 （社）日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400

E-mail : ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643

加入者名 方正友好交流の会

ありがとうございました

昨年（06年）12月に会報第3号を発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意に代えます。ありがとうございました。（敬称略、受付けた順に記載しました。07年5月16日現在です）

遠藤勇 河戸道子 生田和美 田中信雄 石田和久 杉田春恵 鈴木俊作 石原健一
大崎やま子 山口和子 北澤博史 栗原貞子 穂苅甲子男 高良真木 福久かずえ 小栗勝則
永瀬明子 富樫昭治 吉田敬子 山内良子 鳥島せい子 森川忍 秋葉二郎 阿部寛 中島紀子
小倉光雄 斉藤兵一 野田良雄 岡庭成巳 稲川清 松尾政司 師岡武男 丸野公平 小畑正子
田中實 宮腰直子 衛藤藩吉 岡田久子 篠田欽次 千島寛 山田弘子 津久井洋 柴田ケイ子
谷口誠 内山則男 長谷部照夫 木村孝 木下主計 久保祐雄 名取敬和 矢野光雄
久保田雄治 渡辺博司 新谷陽子 町田忠昭 阿久津国秀 小都晶子 金子静子 山本義輝
東山健吾 鈴木幸子 藤井正義 田村順之助 石橋実

書籍のご案内

方正友好交流の会が編集した本と会員の関係著書をご紹介します。

* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』 定価 1500 円

この本には、日本人公墓の建立の経軌跡や由来を王鳳山と奥村が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み全身全霊で稲作指導に捧げ「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆、また方正友好交流の会を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されている。

* 『天を恨み 地を呪いました －中国方正の日本人公墓を守った人々－』

奥村正雄 編著 定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語』にも収録されていますが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちゑさんの息子さんの貴重な体験記も入っています。この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。電話 043-272-9995 FAX 043-272-0214

* 『二つの祖国 ある中国残留孤児の証言』

北澤博史 著 定価 1500 円（税別）

製作・発行 夢工房

著者の北澤さんは1935年長野県赤穂村で生まれ、1940年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様

子や難民となった苛酷な体験を絵と文で描写されています。収録された絵がなんともいえず当時の雰囲気を感じ出しています。直接下記の北澤さんに申し込んでください。

〒250-0001 神奈川県小田原市扇町1-21-10 電話 0465-35-2531

- ＊ 『赤い夕陽の満州にて 「昭和」への旅』 高橋健男 著 定価 3400 円（税別）
著者は1946年、新潟県見附市生まれ。長年中学の教員として過ごし、校長を経て定年退職。近年アジアに目を向け、歴史や文化を研究。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識の下、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著です。本書をご希望の方は直接、刊行先の新風社販売部に申し込んでください。電話 03-3746-4648 FAX 03-5414-3494 です。

編集後記

4月の初めから1週間ほど、日中科学技術文化センターの仕事で、センターの常任理事でもある凌星光氏（日中関係研究所所長、福井県立大学名誉教授）と共に、北京、成都に出張した。その折りのことである。会談や宴席で、凌氏が私のことを当会のことに触れて紹介した。すると、中国側の関係者がたいへん驚き、有意義な仕事だ、感激したと語ってくれたのである。

凌氏も私も、思わぬ中国側の反応に、改めてこの仕事の重要性に思いを新たにしました。

会報の原稿を当初の締め切り日が過ぎても届かず、また書くといわれた方も、そのことを忘れられたようだ。なんとか5月末の総会に間に合わせようとしたので結果的には見切り発車せざるを得ませんでした。ぜひ次回は早めにご送付願いたい。

また、カンパをいただいた方や会員の方々への返礼の葉書に、「方正の会」との出会い、旧満洲との関わりなどをできれば教えていただきたいたいと書いた。その返事を何人かの方々から頂戴し、その一部を＜会員便り＞として掲載しました。慌しく仕事に追われて、そのお礼の葉書を出さずじまいになってしまった人もいます。ご寛容のほどをお願いします。

これからもぜひ、読者の方々の、当会や方正との出会い、方正公墓に参拝された体験などを書いていただければと思う。それぞれ貴重な体験をお聞かせいただき、その体験を共有して、これからの私たちの歩みの参考にさせていただきたいと思っています。お手紙なり原稿をお寄せください。

（大類）

《表紙写真撮影・津久井洋》

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第4号）

2007年5月25日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓

Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6

日本分譲住宅会館 4F

（社）日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643

加入者名 方正友好交流の会